

united bullet

298

2024 冬号

強・用・美の進化 「美」を考える

- 卒業設計をふりかえる
- 弁護士から見た建築家「トラブルを未然に防ぐ」第7回
- 海外レポート
- 覗いてみました他人の流儀
- サステナブル時代の豊かさとは 第3回
- 大井町駅前パブリックスペース設計コンペティションの裏側 第3回
- Meaningful Garden 第3回
- 良質な建築、これからのまちづくり
- 常任幹事会からの報告
- 建築家資格制度を考える 第2回
- 温故知新
- 活動報告
- 学生の会 @joint 活動報告





多様な外構・舗装用タイルで 美しい景観づくりに貢献

株式会社ニットーは1964(昭和39)年に岐阜県土岐市で陶磁器顔料メーカーとして創業。現在は建築外構の床タイルや外壁タイル、ランドスケープ用の舗装タイル・ブロック、天然石舗装材などを企画・製造・販売しています。駅前広場や歩道、デッキなどランドスケープ分野で広く採用され、豊富なサイズ展開とカラーバリエーションで景観づくりにも寄与。全国5カ所に少数精鋭の営業拠点を構え、コンセプトや地域特性に考慮した景観設計をサポートしています。株ニットーのこれまでの歩みや、取り扱い商品について、日東英成社長にうかがいました。

タイルの企画・開発・販売

当社は1964(昭和39)年に私の父・日東重信が岐阜県土岐市で創業しました。陶磁器産業が盛んな地域で、陶磁器顔料メーカーとしてスタートしましたが、仕事をする中でお客様から滑らないタイルはないかと問い合わせがあり、諏訪鉄平石を加工した外構用の石材「木曽石」を開発。それが全国展開されるようになり、続いて外壁用タイル「木曽石コバ」も開発し、次第にタイルの企画・製造・販売に力を入れるようになりました。以降、歩道や橋梁など土木・ランドスケープの分野で使われる舗装用タイルを中心に展開していききました。

東京では甲州街道下の植栽地に使われた当社の舗石タイルを、丹下健三さんがご覧になって気に入られ、赤坂プリンスホテルなど、建物の外構に何度も採用いただきました。それが火付け役となり、建築外構やランドスケープ用のタイルとして広く知っていただけるようになりました。

デザイン性に優れた 輸入タイルも多数展開

2001(平成13)年、私が32歳の時に代替わりをして、自社工場を閉じて設備を協力工場に移管したり大きく改革しましたが、メーカーとして企画や開発は継続しています。舗装用タイルは時代の変化に合わせて、色や形などバリエーションを増やしながらか販売し、それと同時に中国やイタリアの輸入タ



渋谷駅西口デッキ 床タイルを使用



商業施設 床・壁タイルを使用

イルも扱うようになりました。輸入タイルは大判サイズが豊富にあり、デザイン性に加えて品質や強度も高いため、質の高い空間づくりを求める戸建て住宅で多く採用されています。また、木目や天然石を印刷で表現する技術も高く、定期的にイタリアの見本市にも足を運び、最新商品の中からニーズにフィットするものを買付けしています。

また、施工イメージの作成やCADでの割り付け図の作成も行っています。

設計者に寄り添った商品開発を

タイルは耐久性・耐熱性が高く、変色や退色もない長寿命の建材です。さらに当社のタイルは厚さが20mm以上なので割れにくいのが特徴です。ランドスケープなど土木現場での採用実績から滑りにくさはもちろん、つまず

きにくい形状のタイルなど機能面でも優れた商品を多数用意しており、路上喫煙禁止を示す路面用サインタイルなども製造しています。

最近では、蹴込階段を型枠なしで美しく早く施工できる、タイル張り蹴込階段用のコンクリート製下地ブロック「ケコミ」の販売や、住宅にテラスを設けるスタイルが増えているので、室内と調和するテラス用タイルのコーディネートも提案しています。バリエーションが豊富で、在庫も保有しているため、維持メンテナンスや補修にも柔軟に対応します。住宅展示場で採用いただいたり、外構業者の展示会にも積極的に出品していますので、ぜひ機会がありましたらご覧ください。

これからも設計者に寄り添った商品開発を続けてまいります。

NITTO 株式会社 ニットー

<https://nitto-web.jp>

建築・エクステリア用タイル、舗装用タイルを中心に、建築土木用の景観資材を開発・販売しています。

本社 岐阜県土岐市駄知町1707-2 TEL: 0572-50-1550
東京office 東京都新宿区信濃町3(S.COURT 202) TEL: 03-5312-8212

■営業所は、本社(岐阜)、東京、仙台、大阪、福岡の5カ所です。



各営業所に各種タイルサンプルをご用意しています

目次

● 特集

4 強・用・美の進化

「美」を考える

- 4 本能的な美と考える美 キー・オペレーション 小山 光
6 「つりあい」を土俵とした美 ハシゴタカ建築設計事務所・laddeup architects 高見澤孝志
8 「美」は建築がもたらす時間と空間を拡張する 佐藤総合計画 鳴海雅人、小寺 亮

● コラム

- 10 卒業設計をふりかえる 通底する蟻の視点 津野建築設計室 津野恵美子
11 弁護士から見た建築家「トラブルを未然に防ぐ」第7回 近隣トラブルへの対応について② 山崎哲法律事務所 安藤 亮
12 海外レポート メキシコの現在とバラガン建築 AQT一級建築士事務所 皆川 拓
14 覗いてみました他人の流儀 由良拓也氏に聞く 好きなものをつくり続ける Bulletin編集WG
16 サステナブル時代の豊かさとは 一フェアウッドと地域材で未来を切り開く—第3回 国産材の可能性 佐藤岳利事務所(元ワイス・ワイス) 佐藤岳利
18 大井町駅前パブリックスペース設計コンペティションの裏側 第3回 当事者に聞く 審査から設計レビュー 設計者/発注者支援者 座談会 前編 施主と設計者を支援する設計レビュー
20 Meaningful Garden～意味に満ちた庭～第3回 ハーバードで考える東京の極小・都市論 アイダアトリエ 会田友朗
21 良質な建築、これからのまちづくり 脱経済成長とコモンを捉えた建築まちづくり/地球環境と幸せを考える 連健夫建築研究室 連 健夫

● ひろば

- 22 常任幹事会からの報告 2023年度 第1回委員長・地域サミット合同会議(7/28)レポート 山下設計 水越英一郎
23 建築家資格制度を考える 第2回 資格制度の歴史に学ぶ 梓設計 安川 智
24 温故知新 先達に学ぶ 邪道建築家の目指すモノ A・Aプランニング 青木恵美子
25 抱負を語る 予測不能な時代をサバイブする、「状況の中の建築」 ihrmk 井原正揮
抱負を語る 五感を刺激し、能動性を喚起する建築をめざして 御手洗龍建築設計事務所 御手洗 龍
26 活動報告 港地域会×杉並地域会「新・建築家の本棚」 利光収建築設計 利光 収
27 JIA東京都学生卒業設計コンクール 入賞者によるトークセッション 日本設計 木野内 剛
28 交流委員会 Bグループ 歴史的建造物で納涼会開催 一清澄庭園「涼亭」にて一 エスケー化研 鈴木祐一
29 交流委員会 Dグループ 施設見学会・懇親会開催 一熊本城見学会— リリカラ 青山 央
30 次世代のタマゴたち よく見ようとするこゝろ 日本大学理工学部建築学科 伊藤綾香
建築倉庫での展示を通して 国士館大学理工学部理工学科建築学系 山田愛華

● あとがき

- 31 ひといき ウルトラマラソンに挑戦 アライ設計 村田行庸
2 パートナーズアイ 株式会社ニットー 多様な外構・舗装用タイルで美しい景観づくりに貢献

表紙写真：上 「桜木町の集合住宅」 設計 キー・オペレーション (撮影：矢野紀行写真事務所)
中 「taka house」 設計 ハシゴタカ建築設計事務所・laddeup architects、cloda.com10 / archi一級建築士事務所 (撮影：山内紀人)
下 「青森市新市庁舎」 設計 佐藤総合計画・青森建築家集団 (撮影：川澄・小林研二写真事務所)

「美」を考える

本能的な美と考える美

キー・オペレーション
小山 光



「普遍的な美」とは「本能的な美」？

『ウィトルウィウス建築書』の「強・用・美」の一節は第一書の第三章に出てくる。「強 (firmitas)」「用 (utilitas)」が技術的、定量的な基準であるのに対して、「美 (venustas)」は「外観が快く典雅」という定性的な基準であるためか、現代の建築家が作り出す建築の「美」は、「用・強」の論理で説明されるか、全く説明されない。「美」を言葉で他者と共有しようとしても独りよがりにも聞こえてしまうからだ。では、我々が設計する際に全く美的な基準が入り込んでいないかという、全くそんなことはない。建築家は皆それぞれの好みの形状、プロポーションや素材を建築に実現させている。そしてこの建築の「美」は人々がその建築に触れる最初のインターフェースになる。この「美」とは何なのだろうか。

辞書で「美」の定義を見ると字義通りの「うつくしき」とは別に、哲学用語として「知覚・感覚・情感を刺激して内的快感をひきおこすものの中で、個人的利害関心から解放されたより普遍的なもの」とされている。ウィトルウィウスは「普遍的な美」＝「善」であるというプラトンの思想を引き継いでいるが、果たして万人がプラトンのように「美」を捉えているのか、以前より疑問を感じていた。

ヴェンチューリは『建築の多様性と対立性』の中で、ウィトルウィウスに言及した際「用・強・美」の「美」を「喜び」と言い換えている。「美」を意味する Venustas は Venus (ビーナス) と同じ語源で、古英語 Wynn (喜び)、Venery (性的欲望) と同じく「wen-」という原始インド・ヨーロッパ語根を持っており、「欲望を持ち、努力する」という意味がある。ヴェンチューリが善なる美よりも自由な喜びとして、Venustas を読み替えたように、万人が本能的に美しいと感じるものは、高尚なものではなく、むしろ本能的な欲望に基づいたものではないだろうか。

先日 TED Talk で心理学者のデニス・ダットン の「進化論者の美の理論」というレクチャーを視聴した。彼に

よると、人間を感じるさまざまな心理感情は有史以前の人類の心理的進化に基づくもので、例えば暗闇に対する恐怖、脂肪やタンパク質といった食べ物への喜び、異性に対して感じる美は生存や繁殖につながる。人が美しいと感じる風景は、林と丈の低い草と水があるサバンナの風景で、どの気候に住む人も好む共通の風景だそう。また人間が食べる動物や植物は対称のものの方が正常で、非対称のものは正常ではなく、危険だと感じるらしい。また芸術品の場合も、140万年前にホモ・エレクトゥスがつくった薄く鋭い石の刃を見て美しいと感じるのは、精巧な細工をつくることのできる者の方が子孫を残すのに有利だったからそう。この「本能的な美」は私の中でもかなりじっくりくる。精巧な技術を持ってつくられた建築、例えばローマ帝国のコロッセウムは、それを初めて見た未開の地の人々に圧倒的な感動をもたらしたであろうことは想像に難くない。

「本能的な美」と「考える美」

一方でこの「本能的な美」に対して、パッと見ただけでは何も感じなくても、コンテキストを読み込んで、その表現の背景を理解して美しいと感じるものもある。昨年東京都現代美術館で個展を開いた寒川裕人の「White Painting Series」は何の変哲もない真っ白なキャンバスだが、そのキャンバスには100人ほどの人々の接吻がされていることを知って、初めてその愛と記憶の美しさを感じることができる。この美しさは万人が感じる「本能的な美」ではなく、むしろ大多数は「そんな白いキャンバスなんて何の意味があるんだ」と感じてしまい、その白いキャンバスに、本当に価値を見出す人はかなり限られるはずだ。これはかなり頭を使う「考える美」で、抽象画も人によってはあまり美しいと感じない場合もある。

PR活動の一環として、設計したプロジェクトの写真をSNSなどで公開することが多いが、そこで反応が良い(バズる)写真は一定の傾向がある。例えば我々が設

撮影：矢野紀行写真事務所

撮影：矢野紀行写真事務所

撮影：小川重雄

撮影：Nacasa & Partners Inc.



桜木町の集合住宅 (2021)



関内の集合住宅 (2021)



神田テラスビル (2017)



不動前の空地 (2020)

計した「桜木町の集合住宅」(2021年)は正面ファサードの写真がX(旧Twitter)で88万インプレッションまでいったことがあった。この投稿では、集合住宅であること、バルコニーに船舶照明を入れてライトアップしたことしか書いていなかったの、あくまで写真のみに反応したのだと思われる。いいねが5,000を超えると、建築業界関係者よりも、大多数は一般の方々の反応になる。これは上記でいうところの、「本能的な美」(自作を美しいというのは抵抗があるが)として認識されて反響があったのだと思われる。この集合住宅が分譲の投資ワンルームマンションであること、外壁のレンガ調の仕上げが型枠コンクリートであること、木調の仕上げは塗装であるといったことは、その後の投稿や内覧会をご覧になった方々の投稿で共有され、それなりに反響はあったが、多くても数百いいねぐらいで、建築業界内での反応に留まっていた。これはレンガ調の凹凸がタイルを張ったものではなく、ゴム型枠でつくられた凹凸ということや、木調の仕上げは透かし目地を入れて板感を出したうえで特殊な刷毛で木目を塗装しているというプロセスを理解したうえで、美しく感じる「考える美」だったと思われる。

「関内の集合住宅」(2021年)も桜木町と同じ規模の集合住宅で、バルコニーの戸境壁が目立たないようにHPCという薄いコンクリートパネルで覆ったファサードがSNSで反響を呼んだが、桜木町ほどのバズり方はしなかった。ファサード全体の写真だと薄いパネルで覆われているところまでは分かるが、それが金属なのか、それ以外の素材かが分からなかった。ファサードに寄って40mmの薄さで、コンクリートでできていることが分かる写真は、建築業界からの反響はかなりあったが、一般の方々からの反応は薄かった。

「本能的な美」を纏う建築の可能性

関内と桜木町はともに、中規模の分譲ワンルームマンションで、ファサードを決めてしまうバルコニーへの提案だったが、大きな違いはその素材感にある。関内は全てモノトーンで、HPCパネルはその薄さのために糸のように細く見え、周りの空気を繊細に分節するような緊張感がある。桜木町はバルコニー内の木調仕上げという自然素材(実際はフェイク塗装なのだが)でぬくもりがあり、またレンガ調の仕上げも、緊張感というよりは、クラシカルで落ち着いた雰囲気を持っている。また関内はパネルの配置がランダムなのに対して、桜木町のバルコニー開口配置は対称形だ。まさにデニス・ダットンの「進化論者の美」=「本能的な美」の条件の通りの結果になっている。我々の設計したプロジェクトを見ると、木材を外装仕上げに取り入れた「神田テラスビル」(2017)等、木材が外装の一部に入っているプロジェクトの方が建築業界外の人々の受けがとても良い。「不動前の空地」(2020)のようなモノトーンなコンクリートのファサードを持つプロジェクトは、素材感が少ないせいか、人々の視線はよりその空間構成に注目して評価していただいている(美しいとは少し異なるかもしれないが)ため、建築業界内の人々に対しての方が評判が良い。

もともと商業建築からキャリアをスタートさせたためか、「人が集まる方がよい」「賃料が高く取れた方がよい」という感覚があり、コアな建築業界に受けるより、より一般の方々に響くように「本能的な美」を考えながら設計する癖が染みついているようだ。さまざまな設計条件のパズルを解決する「用・強」を建築の発注者に説明しながらつくる「考える美」は、建築をつくり上げていく上で欠かせない要素だが、「本能的な美」を纏う建築が、社会からその存在を愛されれば、取り壊しをされずに存続することができるのかもしれない

「つりあい」を土俵とした美

ハシゴタカ建築設計事務所・
laddeup architects
高見澤孝志



「美」というものを、構造設計している立場から述べてみたいと思う。作家 橋本治は、著書『人はなぜ「美しい」がわかるのか⁽¹⁾』において、「私は、「各人が“美しい”と感じたそのことが、各人の知る“美しさ”の基礎となるべきだ」と考えていて、“美しさ”とは、各人がそれぞれに創り上げるべきものだ」と考えています」と述べている。この言葉に触発され、偉大な構造設計者の美や構造デザインに関する発言とともに、それらの影響を受けながら実務に20年以上携わってきた私が考える美について述べてみたいと思う。

私が影響を受けた偉大な構造設計者の「美」

おそれ多いが、私は坪井善勝先生の孫弟子にあたるため、最初は坪井先生の有名なこの言葉を紹介する。

「真の美は、構造的合理性の近傍にある⁽²⁾」

恩師中田捷夫先生^{かつお}から坪井先生の偉大さや伝説を多々伺った中でも、一番影響を受けた言葉だと思う。

私というか皆さん同じ解釈だと思うが、建築の美しさは構造的合理性の近傍から少し外れたところにあり、構造的な合理性だけを追求しても美しいものにならない、合理性を欠いても美しいものにならない、その近傍を探求するのが構造設計者の力量であり、腕の見せ所と言っているように思う。斎藤公男先生は『多様化する構造デザイン⁽³⁾』において、坪井先生の生前の言葉として「研究論文も構造設計も美しくなければだめだ。人生もまた然り—。構造はロマンだよ。ロマンが無ければただの構造

提供：坪井善勝研究室



東京国際貿易センター2号館（1958年）構造設計：坪井善勝

体だ」「テーマが何であれ、その中にエレガントを見出す努力こそ大切だ」を紹介している。中田先生は坪井先生から「構造を見せる見せないに限らず、見せられる構造体を作りなさい」と指導を受けたようで、私もそのように言われて育った。IASSの初代会長で魅力的なコンクリート作品を多数設計したエドゥアルド・トロハは、「見せる構造は、美しくなければならない⁽⁴⁾」と述べている。2人の大家は「美」というものを常に意識し、建築の美しさと構造の合理性は合致するものではないと言っている。

「美」を生み出すのはそう容易なことではない。川口衛先生は「構造デザインとは単なる知識や技術の機械的な適用でなく、五体、五官を総動員して行う、全人格的な作業である⁽⁵⁾」と述べている。五体、五官を総動員して行うことは感性も重要だろう。川口先生は感性について、「造形感覚のような視覚的、触覚的感性だけでなく、自分が設計している構造が、本当に期待通りの機能を発揮してくれるだろうか、という「懸念」も含めた、ものづくりとしての全感覚を意味しているつもりである」とも述べている。

ものづくりを含めた同様の感性で直観を拠り所とする偉大な構造家を挙げるとすれば、フェリックス・キャンデラではないだろうか。佐々木睦朗先生との対談において「素材自体がもつ強度にでなく、私の拠り所は形（シェイプ）にあります」「建築としての美しさを獲得するには数学以上のものが必要となってきます。それはディテール⁽⁶⁾です」と述べている。計算至上主義ではなく、人間のプリミティブな感覚を大切に作る姿勢がうかがえる。

提供：清水建設



代々木体育館（1964年）構造設計：坪井善勝

提供：Kawaguchi & Engineers



イナコスの橋 (1994年) 設計：川口衛

合理性の近傍の探求

先人の偉大な構造家の言葉を並べてみたが、それらを吟味し、念頭に置きながら設計に従事してきた私は、建築における美を成立させるものは広義的な「つりあい」と考えている。広義的と述べたのは、アリストテレスが言った均斉とは異なり、つりあいには「安定なつりあい」「不安定なつりあい」「中立のつりあい」と3つのつりあいがある。その3つのつりあいが混在し、ほどよいバランスで完成したものが建築における美ではないかと考える。

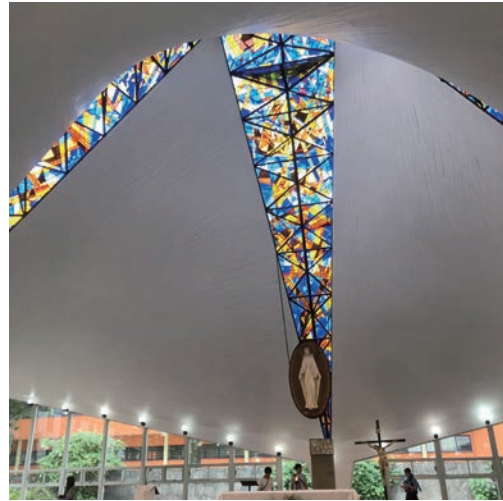
建物を完成し維持するには、周辺環境とのつりあい、骨組みの力学的なつりあい、利用者・施主もしくは管理者とのつりあい、造形的なつりあい、金額的なつりあい、性能としてのつりあい、施工者とのつりあい、設計者間のつりあい、スケジュールのつりあい、変化へのつりあい等、さまざまな要素のつりあいが必要となる。これらのつりあいがすべてマッチして初めて美への土俵に上がることができるのだと思う。

偉大な構造家が手掛けたもので、今回取り上げた作品(写真)は私が美しいと感じる建物である。造形や形式が特徴的なもので、そういうものに直感として惹かれるから設計をやっているのかもしれない。

国立代々木競技場のメインケーブルからスタンド外周にかけて走る吊り材は、屋根形状の美からカテナリーではなく曲げ剛性のある吊り材(セミリジッド吊り材)、イナコスの橋は橋全体が何となくうるさい感じがするという川口先生の直感からラチス材をまびいた不完全トラスが採用されている。このように、さまざまな思考をもとに構造的合理性⇔安定なつりあいから脱却した複合的なつりあいを土俵として美を成立させている。

最後に私の作品「taka house」の階段を取り上げて終わりにしたいと思う。ササラをヒノキ材のめりこみを利用した貫構造とした住宅の木階段である。この階段はエントランスとダイニングを緩やかにつなぐオブジェのよ

提供：皆川拓

サン・ビセンテ・デ・パウル礼拝堂 (1953年)
設計：フェリックス・キャンデラ

うな存在で、費用や時間の関係で大工工事にてできる構造形式がよいと判断し、格子組のササラを提案した。ササラは45mm角で構成されており、強度的には問題ないがガタやクリープによる変形が懸念された。モックアップを作成すると敏腕大工の力量によりガタによる変形はほぼなし。竣工後3年経過するが今のところ問題なさそうである。クリープによる変形に対してはフェールセーフを取っており、10年後への対応も実施している。

この階段はファッションデザイナーの友人に称賛され取り上げてみたが、「つりあい」のある美しい階段となっているであろうか？ 木村俊彦先生の「包丁はいつも研いでおかなければならない。使う時が来るとは限らないが」という言葉を常に頭に置いて、日々鍛錬し、皆さんに美しいと思われる建築をつくり続けていきたいと思う。

〈参考・引用文献〉

- 1: 橋本治『人はなぜ「美しい」がわかるのか』筑摩書房
- 2: 『広さ・長さ・高さの構造デザイン』建築技術
- 3: 『多様化する構造デザイン』建築技術
- 4: 『エドゥアルド・トロハの構造デザイン』相模書房
- 5: 川口衛『構造と感性』鹿島出版会
- 6: 齋藤裕 監修・著『フェリックス・キャンデラの世界』TOTO 出版

撮影：山内紀人



taka house (2020年)

「美」は建築がもたらす 時間と空間を拡張する

佐藤総合計画
鳴海雅人



佐藤総合計画
小寺 亮



オリジナルな人間の存在を問うのが「美」である。

そして「美」は建築がもたらす時間と空間を拡張する。建築はもっと自然の生き物つまり人間を見習うべきだし、逆に言えば、私たちはもっと「美」を通して建築を見つめなければならない。にもかかわらず、建築や都市の「美」について語ることが、テクノロジーの進化と複雑さが増すにつれて、どんどん遠ざかっている。多様性の時代に紛れ込んで、説得力ある批評すら見られなくなった状況に、本稿が小さな楔を打てれば幸いと考える。

原型に立ち返ることから始めさせていただく。紀元前に遡るが『ウィトルーウィウス建築書』によると、「良い建築とは、堅固さ・快適さ・快、という3つの条件によって成り立つ」とする定式が謳われている。このことは“建築”の要素において、2000年以上も前から「強・用・美」が説かれていると考える。

なかでも、ウィトルーウィウスの意味するところの「美」とは、「外観の調和的寸法による構成や装飾」を美の対象としており、建築の形に意味づけられた表現がその時代や地域・文化を象徴するものとして位置づけられている。

筆者2人は、長きにわたって設計活動のフィールドを「公共建築」に置いており、常に、公共とは何か、公共のなかで活動する人間とは何か、そして未来の公共の在

り方を考え、社会に問い続けている。昨今の公共建築の設計でも、街並み・景観において、建物の形が持つ文化的な意味合いや周辺との調和として建築形態や意匠を整えることが条例で定められた地域も多く、公共建築はそのリーディングプロジェクトとして位置づけられることも少なくない。つまり公共建築には、人々の記憶に残る建築・空間というテーマがある。建築や都市の歴史を振り返ってみても、「強」は補強において、「用」は機能転換によって生き延びる建築があるが、「美」は補強やコンバージョンは不可能だ。

一方で、強・用に裏打ちされた「美」ということも忘れてはならない。地震など災害に対して多様な構造形式が取られ、まさに「強」の意味するところである。「用」は、社会的な建物の用途・目的に表れ、ライフスタイルに合わせてこれまではなかった、より多様な建物の使い方となってきた。現代建築においては、強・用と一体になった「美」が求められている。

青森市新市庁舎がもたらす「美」の見立て

毎年夏に青森市で開催される「ねぶた祭」(710年・奈良時代を由来)のねぶたは、構想・設計・製作・祭行事開催・解体に約1年を費やすのだが、ある種の“仮説的建築”とも言える。私たちが設計に携わった「青森市新市庁舎」

撮影：川澄・小林研二写真事務所



「青森市新市庁舎」(設計：佐藤総合計画・青森建築家集団)長い年月をかけて根付いた青森の「美=ねぶた祭」は文化的な財産となることの重要性への気づきを与えてくれる

撮影：川澄・小林研二写真事務所



配置図 クランクの連鎖が織りなす「市民協働の場」



市民の主体性を喚起する「強」＝構造や「用」＝機能を含んだ「美」＝デザイン

を、寿命を定めることのない“仮説的建築”と見立てて考察を進めたい。『ウィトルーウィウス建築書』のように、紀元前まで及ぶ長いスパンで建築・空間を思考することの重要性である。

まず、土台（ベースの舞台）は、敷地は軟弱地盤で60～80mの杭基礎を40本打ち込み建築を下支えする技術は、「強」が作り出す「美」といえる。さらに、庁舎機能空間が既存棟とクランク状につながっていく。まさに、ねぶたの武者人間が踊り跳ねるような、自在な配置構成は「用」を伴った「美」だ。

そして、青森市の都市構成（北に青森湾、南に八甲田山）と同調し、1階は自由通過のピロティを挟んで北の広場・南の広場としている。約20年後に既存棟（議会棟・急病センター）が寿命を迎え、ここに時代に即した建築が自由につながる仕組み（架構）になっている。50年、80年と、新たな公共空間が更新されるであろう。100年過ぎて寿命を迎えたときも、鉄骨や標準品で構成された建築は素材部材の再利用や解体のしやすさで、地球環境に貢献する。このように建築も“仮説的建築”と見立てると建築のつくり方（配置・構造・ディテール）そのものが更新性を伴って、まさにねぶたのように市民に根付く「美」を物語っている。

もうひとつ、建築の表情に注目いただきたい。世界一の積雪都市の雪景色に溶け込む「白い建築」である。色彩は白を際立たせるため微少のブルーを入れた。これはねぶたの和紙張り工程に見立てることができる。ねぶた

の斑点模様を想起する小さな四角い窓（1層2段二重窓）で断熱性能を高めた雪国らしいデザインは、蟬打ちのようだ。建築はねぶた本体のプロポーシオンに比例する。夏の夜空に浮かぶねぶたの「美」は誰もが疑いをもたない。建築も多彩な「美」の見方、批評を議論する場をつくりたいものだ。

青森市新市庁舎がもたらす「美」の共有

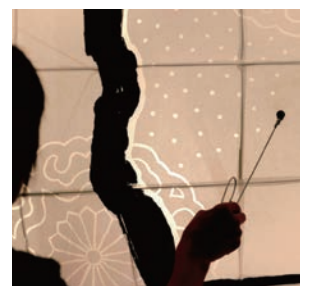
設計のプロセスとして計60回を超える市民ワークショップを行った。1階のほとんどは市民と共に作り上げてきたひろばや市民協働スペースとなり、自由に利用できるスペースが特徴だ。ひろばでは、これまではなかった防災や交通などのイベントが行われ、市民と職員の接点を強化している。市民協働スペースの家具は、市民・職員の協働で設置されている。職員が必ず月1回以上は展示を更新し、情報発信の場にもなっている。

建築において、地球の財産として、市民の財産として根付くかどうかは、強＝構造や用＝機能を含んだ「美」＝デザインの意図が広く市民に理解され、主体性を持って建築に関わっていただけるかどうかだ。その空間に関わる人間の活動が生み出す文化そのものが「美」という見方もあり得る。時代とともに、「美」への眼差しは変容し、未来の人間が思う「美」とは何だろうという問いにも思いを馳せて設計に関わることが、建築家の使命であると思う。そのとき、『ウィトルーウィウス建築書』は改訂されるはずだ。

撮影：川澄・小林研二写真事務所



斑点模様から光がもれ、ねぶたの「美」を喚起する



“蟬引き”で発光の制御

通底する蟻の視点



津野恵美子

1995年東京大学卒業／1997年東京大学大学院修了

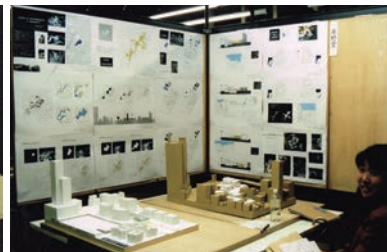
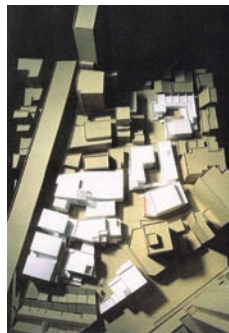
迷うことで得た原体験

私は方向音痴だ。大上段に宣言するものでもないが、空間の中に身を置いた時に、俯瞰の視点で位置関係を把握する能力が、どうも欠落しているのではないかと思う。そもそも建築家としてどうかと思うし、ナスカ入所に聞いた早稲田の先生方の数多くある逸話の中で、入学直後の授業で「この中で方向音痴の人」と挙手をさせ、素直に手を上げた若者たちに「はい、君たちは建築家にはなれません」とぼつさり宣告したというエピソードは、表面上では笑いながらも内心滝のように冷や汗をかいたことをよく覚えている。

自分の立ち位置を、GPSで表示してくれるような便利な地図などなかった時代、紙の地図を片手に行った建築巡りでも大いに迷った。なにせ地図と現在地を同定できないから、こっちに進んでいると思っていたらあっちに行っていた等はよくあることで、なかなか目的地にたどり着けない。その分、地図上では見逃してしまうような、道のわずかなカーブや、ほんの少しの高低差がもたらす、自然発生ながらダイナミックな空間演出は、否応なく初学者の印象に刻まれた。建築の学びにおける原体験は、建築マップの目的地よりもその途上のシークエンス体験にあったように思う。

理想の道を追い求めた卒業設計

卒業設計は、三軒茶屋の演劇学校であるが、実は当時三軒茶屋にも演劇にも全く縁がなかった。これを機に始めた観劇は今でも続く趣味の1つであるし、三軒茶屋も師の自邸を担当させていただいた時から数え切れないほど通い、今ではなじみのある街となったので、縁というもののはつながるものだ。でも当時の自分はそんなことも分からず、ただひたすら「道」がやりたかった。「広場」ではなく「道」。その選択は、居場所はほしいけど、縛り付けられるのは嫌いで、人の傍にいたいけど組織に属することは苦手という、ある種ひねくれて面倒くさい個人的な気質からきている。道には通り抜けるという逃げ場があるし、誰が滞在しても許される公共性もある。皆が同じ方向を向く必要もない。広場がもつ明るい求心性ではなく、物陰を内在した道が持つ離散性を活かした公

卒業設計「SCHOOL for PERFORMING ARTS in SANGENJAYA」の模型写真(左)と展示全景(上)
(東京大学辰野賞、第4回JIA東京学生賞展銅賞)

共空間をつくらうと思った。通り抜けの歩を進めるごとに景色が変わり、見通せないけれど奥は感じられる、私の理想の道をつくりたかった。その理想の道を実現できそうな街区を探すため、二万五千分の一の地形図を23区内ほとんど網羅できるくらい買い集め、地図上であたりをつけては現地をうろつく、ということをして十数箇所繰り返し旗を立てたのが三軒茶屋であり、道路の向かい側で再開発が進んでいたキャロットタワーにあやかって演劇を選んだ。

建築をつくらないと道も奥も浮かび上がってこないから、1万平米を超える建築を設計はしたものの、その建築のあり方には今振り返れば我が身を叱りつけたくなるほど興味がなく、一貫してその間に興味があつた。計画を四期に分けたのも、「私」一人がつくる世界観が息苦しくて、時間軸を入れれば逃げ道になるかと思ったからだ。建築に対する逃げ腰を見透かされ、JIAの卒業設計コンクールではご来場の皆さまから多くのご批判を受けたのも、苦いながらもいい思い出だ。

現在との繋がり

現在私は住宅を主軸とする設計活動を行っており、当時計画しようとした公共空間や道をつくることには携わっていない。だが、当時夢見た離散的で逃げ場がある、奥性を持った居場所のあり方は、ヤマノイエ(2016年/JIA優秀建築選2017)をはじめとした住宅建築の重要な命題となっている。

紙の地図をぐるぐる回しながら迷っていた私は、GPSを手に入れた今もタブレットを片手に違う角を曲がっては右往左往している。いくつになっても鳥の視点は持てそうにない。三つ子の魂百までと諦観しつつも、ぐるぐる遠回りをする蟻の視点でしかできない空間を目指している。

近隣トラブルへの対応について②



山崎哲法律事務所
弁護士
安藤 亮

前回に引き続き、今回も近隣トラブルへの対応について検討していきたいと思います。今回の例でも、要件判断や判断基準が曖昧という点は共通しています。

隣地の使用について

建物を施工するに際し、隣地との距離が狭いなどの事情で隣地に足場を設置させてもらうなど、隣地の一部を使用させてもらう必要が生じることがあると思います。

この点、民法第209条第1項では、「土地の所有者は、境界又はその付近において障壁又は建物を築造し又は修繕するため必要な範囲内で、隣地の使用を請求することができる。ただし、隣人の承諾がなければ、その住家に立ち入ることはできない。」と規定されています。「必要な範囲内」は、隣地使用の必要性と隣地使用により被る不利益の程度を利益衡量して判断されます。より具体的には、当該工事の規模、社会的価値および緊急性、隣地の利用状況および受ける損害の性質と程度、他に可能な方法があるか、などが考慮されます。事案によっては土地を掘削するなど土地の形状を変更することも考えられ、穴を掘ったり岩を切り取る行為、樹木を伐採・移植する行為なども認められ得るとされています。他方で、大幅な形状変更には高度の必要性がなければ認められないともされています。

上記のように、一定の場合には隣地の所有者の承諾なく隣地を使用することができます。しかしながら、結果的に適法であったとしても、承諾なく隣地を使用した場合には禍根が残る可能性が高いので、あくまで最終手段と捉え、事前にていねいに説明して承諾を得るよう努めることが重要です。

日照に関するトラブル

建築家の皆様は当然ご承知のことと思いますが、建築基準法において北側斜線制限、および日影規制が規定されています(条例でさらに厳しい制限が存在する場合があります)。これらの規制をクリアしなければ建築確認申請、中間検査、完了検査の手続きを通りませんので、現代では日照をめぐるトラブルは相当少なくなっています。

しかし、上記公法上の規制をクリアしていても日照権侵害が民法上違法とされ、損害賠償等の対象となることがあるので注意が必要です。

日照侵害が違法となるか否かは、日照侵害が社会生活上一般に受忍すべき限度を超えているか否かによって判断されます。そして、違法性の判断要素としては、①被害の程度、②地域性、③加害回避の可能性、④被害回避の可能性、⑤加害建物の用途、⑥先住関係、⑦加害建物の公法的規制違反の有無、⑧交渉経緯、などが考慮され、これらの要素の中でも①被害の程度と②地域性が裁判実務において重要な判断要素とされています(齋藤隆編著『建築関係訴訟の実務(三訂版)』新日本法規出版、214～220頁)。なお、具体的事案において上記各要素がどのように評価されるかは微妙な問題をはらむので、もし近隣居住者から日照権侵害のクレームを受けた場合は速やかに弁護士へ相談されたほうが良いでしょう。

裁判において上記各要素について判断の結果、日照侵害が違法とされた場合には、損害賠償(慰謝料)の支払いを命じられることとなります。また、高度の違法性が認められる場合は建築等の差し止めが認められることもあり得ます。このような事態になると、建築計画に重大な支障が生じることになりますので注意が必要です。

最後に

実際に建物に住むことになる者にとって、近隣関係は長く続くことになるものです。ですから、近隣の関係者に対し、建築の初期段階からいねいに建築内容や計画を説明し、コミュニケーションを取ることでトラブルを避けることが最も重要です。

他方で、民法の規定や裁判例を把握して原則論を押さえ、対処手段を知っておくことにより、トラブルが起きたときに打開できる可能性を把握しておくこともまた重要です。

話し合っただけで承諾を求めることを待つばかりでは、いたずらに時間を浪費するだけで、今度は施主からクレームを入れられることにもなりかねません。上記規定や裁判例に基づき、法的措置を講ずることにより事態が動くこともある、ということをご承知いただきたいと思います。

メキシコの現在とバラガン建築



皆川 拓

私とメキシコ

メキシコと日本を行き来し、早8年になる。学生時代はスペインに留学していたのだが、同じスペイン語圏であったこと、兼ねてからの憧れであったバラガンの建築も見たいという思いもあり、2015年に初めて訪れた。同じラテン諸国でもスペインは成熟したイメージだが、メキシコはより躍動感があるイメージ。国土も日本の5倍と広く、首都のメキシコシティのみならず、各地に魅力的な都市が点在している。まだ発展途上の国ともいえるが、国民の平均年齢は29歳と若く、国はエネルギーに満ちている。

社会人経験の後、2018年にメキシコに留学。メキシコ人の伴侶を得たこともあり今では第二の祖国のような存在だ。昨今では日本でもメキシコに関する美術展が開催されたり、雑誌での特集、本場のメキシコレストランが数多くオープンしたりと、日々の生活においてもメキシコの文化に触れることが多くなった。今回のレポートでは、そんなメキシコの魅力やバラガン建築の魅力、メキシコの今をお伝えできればと思う。

首都メキシコシティの魅力

国の中央に位置するメキシコシティ（以下シティ）。標高は2,240mと階段を上るだけで息切れをするような高地に位置する街。メキシコに留学した際、この街で私は1年間生活をしていた。シティの人口圏は2000万人（メキシコの総人口は1.29億人）とも言われ、朝夕は渋滞が日常茶飯事、2、3時間メトロで通勤する人もいる。

シティの魅力の1つ、それは芸術が身近にあふれていること。至るところに美術館が点在し、その数、美術館と博物館合計で130以上もあり、世界有数のアートシティなのだ。驚くべきはその展示内容の密度と作品数の多さ、そのほとんどが無料で入れるという気軽さにある。メキシコでは1920年代から1930年代にかけてメキシコ革命下で壁画運動が起こった歴史があるのだが、建築のファサード全面を壁画で装飾した建物も数多く見られる。

超高層のビルが立ち並ぶシティ、少し歩けばタコスの屋台が何台も並ぶストリートに出会えるヒューマンス



シティの中心地



シティの美術館

ケルな街並み。実は日本食と同じように、メキシコ料理はユネスコの無形文化遺産に登録されているほど食が豊かな国である。唐辛子(チリ)、トマト、アボカド、バナナなどメキシコ発祥の食べ物は多くあり、地域ごとのローカル風土を楽しめるのもメキシコの醍醐味といえる。

地方都市の魅力

メキシコの最大の魅力は地方都市にあると言えるだろう。“宝石箱をひっくり返した”と表現されるカラフルな街並みが有名なグアナファト、日本からは新婚旅行で訪れる人も多いカンクン等、訪れるべき地方都市を挙げると切りがない。中でも一番のおススメはオアハカである。シティからも近い食と文化の街で、世界の観光都市ランキングでもトップに輝いたこともあるこの街は、一度行くだけで魅了されてしまう、メキシコの魔法にかけられるような場所だ。



グアナファトの街



オアハカの街



バラガンの書斎(午後の光)

ルイス・バラガンの魅力 ～バラガンが持つ暗さ～

色鮮やかな色彩が特徴的なバラガン建築。日本でもバラガン好きな方は多いと思う。自分もそんな1人で、メキシコ留学中、世界遺産であるルイス・バラガンの自邸と仕事場(バラガン財団)で働ける機会を得た。バラガン自邸は世界中から観光客が訪れる場所であり、そこでバラガン自邸を巡るガイドを担当したのだ。数ヵ月の間バラガン自邸に通う中で、常に新鮮な驚きをもって発見があるのがバラガン建築の魅力だ。彼が死去するまで約40年にわたり住み続けた場所であるが、世界遺産となったバラガン自邸の魅力をいくつか記載したいと思う。

①時間による変遷

ここで言う時間には2つの意味がある。短期的な変化と長期的な変化だ。バラガンの空間に身を置いてみると、時間、天候、季節によって大きく空間の見え方が変化することが分かる。同じリビングでも陽の入り方によって大きく印象は異なるし、夕暮れになるといっそう変化が現れる。また、バラガンは自邸の建設から死去するまで約40年間この場所で生活をしているが、常に空間の増改築を繰り返していた。色彩の壁も当初は色がついていない部分もあり、いかにバラガンが試行錯誤を繰り返し、また当時の生活の要望に合わせて空間を変化させていったかが分かる。

②圧倒的な暗さ(静寂さ)

実際に感じるバラガンの空間は実に暗い。もちろん、我々が一般的に想像するようなメキシコの強い日差しの中で際立つバラガンのピンクも存在する。しかし、一步空間に身を置いてみると、そこで感じるのは陰影の中の光と影の揺らぎのような穏やかな静寂さなのだ。

③住宅と庭の融合

「住宅は庭のように、庭は住宅のように」。バラガンの残した言葉だが、彼は常に内部空間と庭の融合のあり方を模索していた。バラガン自邸の内部空間に身を置くと、時間によって庭は大きく表情を変え、それが内部空間に強く影響していることを感じる事ができる。

④アートとの融合

内部空間は常に絵画、工芸品などのアートの要素が深く関連している。色彩や光の反射、計算されたレイアウトなど、1つのアート作品が空間に影響を与え、光の移ろいも相まって見事な一体感を生み出している。

⑤師と協働者の存在

バラガンには色彩の先生と呼べる存在がいた。メキシコの色彩や伝統技法に精通していたチューチョ・レジェスである。バラガンは現場で常に彼にアドバイスを求め、それぞれの色彩を決めていたという。家具設計はキューバ人女性デザイナーのクララ・ポルセットと協働していたし、他の芸術家との関わりも含め、バラガンの空間はさまざまなコラボレーションによって生まれている。

バラガンについては話すと切りがないが、私がバラガン自邸で行っていた空間解説を記録した動画がWebで見られるので、興味のある方は弊社HPの「Works > ルイス・バラガン研究」から見ていただければ幸いである。

メキシコでの活動

現在事務所では日本国内でリノベーションを中心とした設計活動を進めつつ、メキシコでも複数の計画を進めている。スタッフは全員メキシコ人、常にリモートで仕事をしてきている。コロナがもたらした最大の恩恵は国境を越えても仕事が進められることであり、年代も国籍も違う中で、建築という言葉で豊かな空間づくりのために協働できるのはとても楽しい試みである。メキシコは日本と違ってプロジェクトの進捗は極端に遅いが、小さなホテルも開業予定であり、日本とメキシコを拠点にしながら今後も進めていく予定である。

皆川 拓 (みながわたく)

AQT一級建築士事務所、(株)HaS代表

2007年 千葉大学工学部デザイン工学科(建築)卒業、2010年 千葉大学大学院工学研究科修了、2011年 RCR arquitectes (Spain)にて研修、2011-18年 AE5 Partners勤務、2018-19年 メキシコ政府奨学生として渡墨、2019年 AQT一級建築士事務所設立、2022年 (株)HaS設立。

ゆらたくや
由良拓也氏に聞く

好きなものをつくり続ける



今回お話をうかがったのは、レーシングカーデザイナーの由良拓也さん。日本のモータースポーツ黎明期からさまざまなレーシングカーをデザインされてきました。現在はモータースポーツ関連のお仕事はもちろん、カーボンファイバーを用いたプロダクトデザインも数多く手掛けています。

——レーシングカーのデザインを始めたきっかけから教えてください。

父が工業デザイナーで、小さい頃から自宅の工房で父がクレイモデルをつくるのを見て、僕も粘土で真似ごとをしたりしていました。父は車が好きで、まだ自動車も少ない時代でしたが、家には車があったので自然と車が好きになり、勉強もしないでいつも車の絵を描いているような子どもでした。

高校は育英高専のデザイン科に行き、そこでデザインの基礎を学びました。レーシングカーに憧れていましたが、当時それは雑誌の中や海外のものでしかありませんでした。ところが自宅の近くにレーシングカーをつくる日本の草分けのような会社ができたのです。それはもう運が良いのか悪いのか……。そこに入り浸るようになり、学校にはだんだん行かなくなり中退。気付いたらレーシングカーの世界に本格的に足を踏み入れていました。

その会社では従業員ではなく丁稚奉公のようなかたちで働きながらいろいろ教えてもらいました。18歳の小僧ですが、父の影響でFRP（繊維強化プラスチック）は触ったことがあるし、モデリングはできるし、絵も描ける。だからすごく重宝がられて、二十歳の頃にはいろいろな人に頼まれてレーシングカーのボディーをつくるようになっていました。

——二十歳くらいから個人で仕事を受けていたのですね。

はい。当時そういうことをできる人がいなかったので仕事はたくさんありました。つくってみてダメだったらなぜダメだったのかを考える。失敗の数の多さが成功の確率を上げるようなものづくりでした。

そして1975年、25歳の時にレーシングカーを製作する会社ムーンクラフトを設立しました。レーシングカーは速いものが支持されて、遅いものはダメ。すごくわかりやすいんです。当時は今よりもチームやメーカーごとの特色が強くて、デザイナーも作家のように個人的なことを考える人がたくさんいて、とても面白かったです。

——デザインはどのように考えていくのでしょうか。

基本ゼロからですが、車体の大きさや全高、フロントガラスの面積などに厳しいルールがあり、その中でデザインしていきます。それほど意識はしていませんが、シャープな形があまり好きではないので、自分が線を引くと、ぼてんとした丸い形のデザインになることが多いです。

——1983年のマツダ717Cがとても印象に残っています。これはル・マン24時間レースに出ていますね。

マツダ717Cは、まだ技術的な裏づけが少ない時代だったので苦労しました。ル・マンはユノディエールという6キロの長い直線があるので、空気抵抗の少ない車を



マツダ717Cのスケールモデル

目指しました。風洞実験はこの車くらいから始めました。筑波にある風洞で、ノウハウがないのでひたすら空気抵抗を減らす実験をしたのですが、数値上の空気抵抗は少なくできても車はやはり下に押し付ける力が重要で、浮いてしまうとスピードが出ません。レースではカーブからの脱出スピードも遅くて、そのあたりのさじ加減が難しかったです。今は自社に風洞実験設備があり、レーシングカーをはじめ、さまざまな開発で利用しています。

マツダ717Cをつくってフランスのル・マンに持って行った時も、フォーミュラカーをつくってそれをヨーロッパに持って行った時も、力の差にガツンとやられました。我々は歴史と経験が少なすぎるので、こりゃダメだと思いましたね。モータースポーツの中心はやはりヨーロッパにあって、脈々と続けているのがヨーロッパのメーカーの強さだと思います。日本は所詮井の中の蛙。歴史の違いや技術の差などあらゆるものからそれを感じましたし、“極東”という言葉の意味を痛感しました。

日本で得られるものは何もなく、すべて自分から取りにいかなければ何ひとつ得られない……そんな絶望感がありました。でも懲りないんですよ。ずっと続けていれば絶対に何かあるはずだと信じています。

— ボディーがFRPからカーボンファイバーに変わったのはいつ頃でしょう。

80年代終わりから90年ぐらいです。カーボンには値段が高いですが、軽くて高剛性で性能が良いのが利点です。

カーボン繊維は布状ですから、かなり応用が利きます。例えばレーシングカーを1台つくろうと思ったら、服のデザインと同じようにパターンのような型紙をつくるんです。そして、強度によってどの繊維をどう使うかも全部型紙にして、それを型に当てていき、何枚か重ねて固める。なのでできない形はありません。FRPより硬いので加工は大変ですが、ウォータージェット（水）でカットすることもできます。もちろん大きな衝撃を受ければ壊れますが、それまではパリッとして非常に軽いのです。衝撃を受けた時に運転席まで致命的に壊れないように、モノコックフレームには芯材が入っていて、それもカーボンで頑丈にできています。

僕アナログ人間なので、形をつくるのはまずアイデアスケッチを描いてクレイモデルをつくりませんが、そこから先はクレイモデルをレーザーでスキャンして、それを3Dプリンターでモデル化して風洞実験をします。以前に比べて開発期間は圧倒的に早くなりました。さらに、CFDというコンピューターで流体解析をし、その両方から形を決めていきます。ボディーをミリ単位で削ったり足したりして、小さな差を積み重ねてつくっていきます。

— 由良さんと言えば、ネスカフェのテレビCM「違いのわかる男」に出演されていました。建築家の清家清さんも出ているシリーズでした。

1984年頃ですから30歳くらいでした。清家さんは父と交友があり、実は父が東京を出て御殿場に建てた家は清家さんの事務所デザインシステムの設計で、図面は難波俊作さんが描いてくださいました。その後、僕がその家を二世帯住宅に増築して今もそこに住んでいます。

建築は変わりましたよね。特にザハ・ハジドのデザインは形が先に考えられていて、それまでの建築とは全く発想が違う、今の技術があるからつくることができるものだと感じました。レーシングカーもカーボンファイバーに変わったことで作り方が大きく変わりました。昔はシャーシというアルミのモノコックがあって、そこにボディーと呼ばれるFRPの皮を被せたんです。今はこのボディーの皮がカーボンファイバーになり強度を持たせているので、外皮全部がシャーシなんです。つまり、外皮が決まってから、構造計算をしながら応力が集中する部分を厚くしたりして形をつくっていくのです。だから外側の形から考えられたようなザハのデザインを見ると、なんだかレーシングカーっぽくて興味深いです。



風洞実験室で風洞実験について説明される由良さん



マツダ717Cの模型の前で

— カーボンファイバー製品はその他にどのようなものを製作しているのでしょうか。

カーレース関係では、メーカーのカーボン部分の開発の手伝いや、小さな部品の製造も行っています。その他には、ドローンやカヌーもつくっています。

カヌーは、東京五輪でカヌースラローム男子カヤックシングルの日本代表にも選ばれた足立和也選手が使用する競技用カヌーを開発しています。スラロームは激流の中をゲートを通過しながら下る競技で、スピードはもちろん、ターンをする時には操作性も求められます。レース用の海外製のカヌーは、カーボン製でも水に合わせてしなるのですが、私たちのレーシングカー用のカーボンとはそれとは製法が大きく異なり、ものすごく硬くて表面の張りも強いのが特徴です。競技では直線は速いのですが、激流の中を回る時には船が突っ張ってしまうのが課題で、長所と短所の狭間で揺れています。

カヌーでは、僕がずっとやってきたレーシングカーの流体力学の理論は一切通用しません。だからパドラー（こぎ手）のコメントをもとにメイク&トライを繰り返しています。今14艇目をつくっているのですが、まだ満足のいくところにたどり着いていません。パリオリンピックに向けて、改良を重ねながら挑戦し続けています。

— 貴重なお話をいただきありがとうございます。

インタビュー：2023年7月20日 ムーンクラフトにて
聞き手：市村宏文・佐久間達也・小倉直幸・中澤克秀（『Bulletin』編集WG）

PROFILE

由良拓也（ゆら たくや）

レーシングカーデザイナー・乗り物造形作家
ムーンクラフト株式会社 取締役社長

1975年、24歳の時にレーシングカー開発製作会社ムーンクラフトを設立。1986年、社内に風洞設備を建設し、レーシングカー開発で数々の実績を収める。1988年、カーボン製品製作のためオートクレーブオーブンを導入。現在では航空機部品、各種工業製品などへ応用範囲を広げ、ドローン、各種試作車両、ショーカーなどの分野においても高い評価を得ている。

国産材の可能性



佐藤岳利事務所
(元ワイス・ワイス)
佐藤岳利

2011年3月11日、私は東京・表参道のショールームでクライアントとミーティングをしていました。突然の経験したことのない凄まじい揺れに、瞬間的にこれはただ事ではないと感じました。すぐに東北沿海部に津波が押し寄せ、その後、福島第一原発事故が発生。今すぐ日本から脱出したほうがいいのかと、海外の友人から何度も電話がかかってきました。余震はその後も続き、ほぼすべてのプロジェクトが延期または中止になりました。

社員に自宅待機を命じ、ひとり会社にいると、『オルタナ』という雑誌の森 撰代表が現れ、「タケさん、ここにいてもしょうがないですよ。もっとひどい目にあっている人たちを助けに被災地に行きませんか？復興リーダーの知り合いを訪ねましょう」と言うのです。確かにここにも不安だけで何も生まれなさそう。よし、行動あるのみだ！と決断。森代表の知人と共に福島、宮城、岩手の沿海部に向かいました。テレビでは見ていたものの、被災現場は想像を絶する状況で、言葉を失いました。

復興リーダーの中にくりこま高原自然学校の佐々木豊志校長がいました。栗駒山にある自然学校に泊らせてもらうことになり、その日は夜通し話をしました。佐々木校長は私に「復興には10年、20年と相当の時間がかかるだろう。あなたがビジネスマンであるなら、今すぐ東京に帰って、被災者たちが長い時間を掛けて自分たちの力で立ち直れるような仕事をつくってください」とおっしゃいました。被災地の木材を使って、被災された人たちと家具をつくることはできないだろうか。これまで海外の木でつくってきた家具を、被災地や日本の木に代えることはできないだろうか。東京に戻る車の中で、そんなことをぼんやりと、しかし真剣に考えていました。

地域の木と本気で向き合う

熱帯雨林など木材のリスクや違法伐採について熟知しているワイス・ワイスですが、フェアウッドに切り替えた産地は主に北米や東ヨーロッパでした。それは、ワイス・ワイスが取り引きしている下請け協力工場が、これまで国産材を扱ったことがなかったからです。何度か国産材への切り替えの話を持ち出しましたが、流通してい

ない、有ったとしても品質が悪く、価格が高く、納期の保証ができないの一点張りでした。

私は、佐々木校長、そして被災者との対話により、改めて国産材と本気で向き合うことを覚悟し、もう一度林業地や製材所を訪ねることから始めることにしました。

日本の林業地を10年越しに訪問し続け、分かったことが3つあります。1つ目は、林業地といっても地域によって状況が全く違うこと。2つ目はどの地域も疲弊し、経営的に大変困難な状況に陥っていること。そして3つ目は、100年単位で山(森)のことを考えている立派な林業経営者が各地にいること。「国産材だからいい」ということではなく、例えば、再生林に取り組んでいたり、森林認証(FSC、PEFC、SGECなど)を取得していたり、生物多様性のことを考えていたり、100年先の未来を考え、よりサステナブルな森づくりをしている尊敬すべき人びとがそこにいました。一方で、利益優先で利根的な山林所有者、事業者もたくさんいることも分かりました。

ワイス・ワイス 国産材・地域材日本全国ネットワーク



全国の林業地や製材所、木工所を訪ね歩き構築した木材調達ネットワーク

日本の森林の現状と課題

林野庁によると、森林面積は長年横ばいですが、森林蓄積は年々増え続けています。木材として活用できる木が増加し続けているのです。実際、1966年から2021年までの55年間で、森林蓄積は約3倍に増加し、人工林が占める森林蓄積の割合は3割程度から6割程度に増えています。これは、海外の安価な木材の輸入を背景に、国内の森林伐採、利活用が減少していることが一因です。森林資源として利用できる木々を伐採せず放置してしまうと、資源として使えない木々が残る、将来的には森林資源が減少して、さまざまな環境問題を起こす引き金に

もなります。森林は二酸化炭素を吸収し、酸素を排出する役割を果たしていますが、木々が成熟すると二酸化炭素の吸収量が減り、排出する二酸化炭素量の方が多くなり、地球温暖化防止機能は低下していきます。また、森林が手入れされないと、山火事、害虫の発生、土砂災害が増える可能性も高くなります。世界では森林伐採が深刻な問題となっていて、植林などで回復に努めなければならない状態ですが、日本では豊富な森林資源を有効に活用し、健康な森を保つ必要があります。建築、内装、家具など、用材として積極的に使うことで、豊かな森、自然環境づくりに貢献することができます^(注1)。

広葉樹と向き合う

皆さんは国産材の19%、広葉樹の94%が木材チップになっていることをご存じでしょうか？国産材^(注2)に向き合おうと決心し、東北の林業地に分け入ると、多くの木がパルプチップになっている現場に出くわし衝撃を受けました。50年、100年かけて育った大木が、パルプチップ工場に運ばれ、片っ端からチップに粉碎されていく光景を見て腰が砕けました。これは一体どういうことなのか？所有者に聞くと、ある程度いい値段で、安定的にしかも大量に買ってくれるので助かっていると言うのです。

太い部分を建築や家具用材として使い、端材をチップに回すのなら分かるけれど、最初からチップ工場行きとは悲し過ぎる。ロシア産オーク材で生産していたオリジナル家具を、クリ材に替えることができないか？チャレンジしてみると、それまでと同じ価格でできることが分かり、切り替えに成功しました。



岩手県 パルプチップ工場



北東北のクリを使ったオリジナル家具

宮城県・諸塚村 クヌギの事例

ある日、国際環境NGO FoE Japanから、宮城県^{もろつか}諸塚^{そん}村の大きく育ち過ぎたシイタケ栽培用のほだ木であるクヌギを使って家具をつくりませんか、という電話が掛かってきました。諸塚村は原木を用いたシイタケ栽培の発祥の地で、一時は相当な生産量を誇っていました。しかし現在は菌床栽培が主流となり、クヌギの木は無用の長物として山の中で大きく育ち、本来は適正な時期の伐採と植林による更新が必要な森は、新たな植林が行われなくなり、自然を生かす好循環の森が機能不全に陥っていました。森林率95%のこの地域は、明治期の1907年に林業立村を宣言し、村民総出で森を育てて暮らしてき

ました。そして2004年、自治体ぐるみとしては日本初となるFSC FM認証^(注4)を取得。諸塚村は小さな子どもからお年寄りまで皆がFSCについて語る事ができる、まさにSDGsを実践している村なのです。

クヌギの木は想像以上に硬く、乾燥すると割れや反りの動きが大きく出るため加工が困難で、なかなかうまくいかない状況が続きましたが、3年後、ついに1つの椅子が完成。ワイス・ワイスもFSC CoC認証^(注3)を取得して、FSCファニチャーとして販売が始まりました。長い年月が掛かった分、お互いを訪ね合う関係に発展し、毎年夏になると諸塚村の小学生たちが東京のワイス・ワイス



毎年、夏になるとやってくる諸塚村の小学6年生

にやってきて、日本の森や世界の環境、FSCやトレサビリティの本質的な意味や価値、そして本当の豊かさについて学び合っています。

針葉樹と向き合う

さいごに、栗駒山の佐々木校長との出会いから生まれた、栗駒山のスギをつかった椅子の話をしましょう。

スギ材は柔らかく、特に椅子のような細い意匠に向きません。また、栗駒には大工や建具職人はいても、家具職人はいませんでした。スギの弱点を克服するために、部材の繊維を交差させるように積層し、背柱と脚と座枠を一体化させる工法を考案されたデザイナーの榎本文夫さんにプロジェクトに参画してもらい、何十年もスギに慣れ親しんできた製材所の職人や大工さんと共に、何度も試作を繰り返し、2年後、JIS規格の3倍の強度を実現した椅子がついに誕生しました。森づくりから、木の伐採、素材生産、製品加工までをワンストップで行う体制、仕組みが完成したのです。栗駒山の麓では、経済も森も循環する健全な山づくりと共に、純栗駒生まれの柔らかくて温かい椅子づくりが今日も行われています。



栗駒山のスギを使ったオリジナル家具

(次号「フェアウッドで未来を変える」へつづく)

〈注〉

- 1: 出典：森林・林業白書 <https://www.rinya.maff.go.jp/j/kikaku/hakusyo/r3hakusyo/attach/pdf/zenbun-34.pdf>
- 2: 出典：農林水産省、令和4年木材統計 https://www.maff.go.jp/j/tokei/kekka_gaiyou/mokuzai/toukei/r4/index.html
- 3: FSC認証：FSCの認証木材は、FSCの責任ある森林管理の規格を満たした認証林から生産される。森林が責任をもって管理されているかを審査し、認証するのがFM認証であり、認証林から収穫された認証材が消費者の手に届くまでの加工・流通過程を認証するのがCoC認証。

当事者に聞く 審査から設計レビュー

— 設計者／発注者支援者 座談会 前編 —



2018年「JIA 建築家大会2018東京」のメインイベントとして企画された、実施コンペ「大井町駅前パブリックスペース設計コンペティション」。このコンペに関わった方々にコンペ実施の裏側を振り返っていただき、4回にわたりお届けします。今号と次号では、最優秀賞に選ばれた設計者と、企画から設計支援を担ったJIA担当者、そして審査委員長の千葉学さんに、審査やこのコンペの特徴であるレビューのことを語っていただきます。

座談会

施主と設計者を支援する設計レビュー

参加者	川嶋貫介	設計者／川嶋貫介建築設計事務所、元・あかるい建築計画
	齋藤信吾	設計者／齋藤信吾建築設計事務所、元・あかるい建築計画
	根本友樹	設計者／早稲田大学、元・あかるい建築計画
	千葉学	審査委員長／東京大学教授、千葉学建築計画事務所
	藤沼傑	2016-2020年度 JIA関東甲信越支部長
	相坂研介	JIA建築家大会2018東京 大会実行委員会企画部会長／ JIA関東甲信越支部常任幹事 発注者支援WG
	田口知子	進行／広報委員会委員長



左から時計回りに、根本友樹氏、齋藤信吾氏、川嶋貫介氏、佐久間達也編集長、相坂研介氏、千葉学氏、藤沼傑氏、田口知子広報委員長

田口 **広報** はじめに、審査の時のことから教えてください。
千葉 **JIA** まずこのコンペは、設計者の実績を問わなかったところが素晴らしかったですね。僕自身も公共建築を設計する機会が得られず苦勞した時期があったので、審査員をお引き受けしました。1次審査では、5名の審査員がそれぞれ何票か持ち、全応募案をひと通り見た上で票を入れ、票数の多い順に並べてひとつひとつ議論をしていきました。1票しか入っていない案もきちんと議論した上で、1次通過の5案を選びました。あかるい建築計画の案は、最初僕しか票を入れていなかったと思います。

公共トイレは、不衛生で使いたいと思えないイメージがあります。それは管理運営上の問題もありますが、建築の問題も大きいと思っています。どうしても公共トイレらしい佇まいというのがあって、それ自体が変わらない限り今のイメージを変えるのは難しいと思います。それから今回の立地は、駅前といっても少し外れたところで、場所のコンテクストが捉えにくい場所です。そういう場所にどうトイレがふさわしいのか、さらに、LGBTQのことなども考えると、解決すべき課題もたくさんありました。

1次審査で票が集まりやすいのは、丁寧に設計してあったり、その場所のコンテクストに的確に答えているような優等生的な案です。その中ではこの案は異質で、一見オブジェみたいに見えますが、僕はそのくらい抽象度の高いものの方があの場所には良いと思ったんです。というのは、あの敷地は訪れる人によって読み解き方がいろいろで、駅前広場のような中心性があつたり、大勢が集うような場所ではありません。

最初にこの案を見た時に、巨大な抽象彫刻のようにも見えるし、インフラのようにも見えたり、そういう1つのイメージに固定されない、多様な読み取りを許容してくれる案ということに僕は惹かれました。その後、プランや図面を細かく読み込んでいく過程で、ジェンダーレスのトイレにも的確に答えているのはこの案しかないことが分かり、だんだん票を集めていきました。

田口 **広報** 現代アートのようにも見えるので、建築家が突っ走った案という印象を持つ方もいるかもしれません。

藤沼 **JIA** 最初の印象はそうかもしれませんが、快適なベンチを作ったからといって快適になるような場所ではありません。なので、ただ優しい建物は僕は駄目だと思いました。

田口 **広報** 分かりやすさや優しさを切り捨てた案を思い切って選んだということでしょうか。

千葉 **JIA** 優しさって何かは簡単に説明できることではないですよね。もしかしたらジェンダーレスということが一番優しいと言えるかもしれない。だからそのようなわかりやすい説明だけに頼るのではなく、その案が持っている未来に向けての可能性をちゃんと拾い上げるのがコンペの場では大事だと思っています。

僕は最近すごく過敏に反応していることがあって、それを説明可能性問題と呼んでいます。今の時代、ワークショップやコンペのプレゼンなど、いろんな場面で建築の説明を求められますが、この説明をすることが逆に建築を縛っていないかと危惧しています。つまり、ここは環境負荷を低減するためにこうつくり、市民がこう求めたからこうしましたと説明

しなくてはいけない側面は、建築には確かにあります。でも設計者がその説明から建築をつくるようになったら、建築はすぐつまらないものになってしまうと思うんです。だから僕は建築は、現時点で説明可能なことだけでつくりたくない方がいいと思っています。この案はそういう意味で説明がまだうまくできない、なぜこれが良いかと聞かれても、その時は「何となく」としか言えない。でもそれをコンペで切り捨ててはいけないと僕は思っています。

田口 広報 けれども、施主には説明しなくてはならない部分が当然ありますよね。

相坂 JIA もちろんです。建ちようのないものが審査を通っても困りますから、品川区からは担当の公園緑地課だけでなく、土木課や建築指導課の方にも審査に立ち合っていたら、5組が選ばれた後、確認申請を受け取れるかどうかのプレチェックはしていただきました。

田口 広報 二次審査は2018年の建築家大会東京で行われました。

川嶋 設計者 審査員の方が建築家で3名、品川区の方が2名いらっしやって、5組がプレゼンテーションした後にその場で票を入れてくださいました。品川区の方は我々には票を入れてくださらなくて、建築家の方が我々に入れてくださり、最終的に千葉さんや他の建築家の方が議論する中で我々を押しくださいました。やはりJIAが完成まで付き添って設計レビューをするという前提がなかったら、最終的に区の方が我々の案でOKを出してはくださらなかったと思います。

千葉 JIA やはり発注者側からすると、あまり経験のない若い建築家に頼むのは心配なんです。だって雨が漏ったり、お金が合わなくなったり、工期が間に合わないなど、トラブル起きたら大変ですから。だから、コンペを実施したことに加え、その後に設計レビューをきちんと行ったプロセスが今回のコンペで最も重要な部分だったと思います。

田口 広報 設計レビューとは、具体的にどのようなことを行ったのでしょうか。

相坂 JIA 設計の質を担保するために、JIAが設計レビューを業務として受けて、完成まで併走するというもので、この仕組みは最初から決まっています。レビューは、意匠は千葉さん、構造は金箱温春さん、設備は松尾和彦さんをお願いして、JIAから戸川照二さん、近藤昇さん、藤沼さん、私が入り、基本設計と実施設計時に行いました。僕たちJIAは、発注者である品川区に、設計者がひとりよがりにならないように、欠陥のある建物をつくらないようにサポートしますというのはもちろんですが、JIAは建築家を守る建築家のための団体でもあるので、設計者を孤立させないという意図もありました。レビューは工事に入る前に4回行いました。

千葉 JIA 私はレビュアーとして建築的な観点でいろんな懸念点をあかぬけ建築計画の皆さんにお伝えしました。雨仕舞いのことや、鉄の錆びの懸念、天井の高いところで蜘蛛の巣が張ったらどうするのか、落ち葉がたまったらどうやって掃除するのかなど、あれこれ言いました。それは建物が長く良い状態で残っていくために、こういうことは考えておいてほしいという視点で、気づいたことは何でも言いました。

それに対しては彼らは本当に真摯に対応してくれたので、僕は見ていて安心感がありました。

根本 設計者 レビューでリストアップしてくださった懸念点は、基本設計時に134項目、実施設計では44項目ありました。

川嶋 設計者 それをレビューの場でひとつずつ図面と照らしながらご説明し、そこでまた宿題いただいて持ち帰ることを繰り返しました。我々の少ない経験の中で、時間もあまりない中すべてのことを検証しながら設計するのはやはり難しかったです。ですから検証すべきポイントを指摘してくださったのはとてもありがたかったです。もちろんそのひとつひとつに答えていくのは大変でしたが、それらのやり取りが不安要素を取り除くだけでなく、デザインを見直し収斂させる機会にもなりました。

田口 広報 建築家はデザイン重視と思われてしまうこともありますが、長く使われる建物としてさまざまな点できちんと検証したということですね。

千葉 JIA もちろんそういったことまで考えている建築家が多いのですが、世の中はデザインか性能か対立的に捉えてしまうことがあります。でもそれは決して対立軸ではなくて、今回のような過程があればずっと両方兼ね備えたものができるはずなんです。そういうことを示す1つの実践の仕組みとして、今回のレビューがあったと思っています。

藤沼 JIA 自画自賛かもしれないけど、私はこの案は、近年つくられている公共トイレのどの案よりもユニークで面白いと思っています。

千葉 JIA 面白さの質が違いますよね。やはりこの案はトイレとしてもよく考えられてるし、いろんな意味で非常にレベルの高い案だと思います。

斎藤 設計者 おそらくコンペでしか成立し得なかった案だと感じています。このコンペの案を3人で考える時に、ずっと新しいトイレの「かた」について議論していました。トイレの形式を変えて、それをいかに普遍化できるか。今回、レビューを通して当初7棟だったものが6棟になり、工事費やJRとの調整もあり、いろいろなことで変わっていきましたが、我々はもちろん、品川区もJIAの皆さんも、最初に提案にあった新しい形式をつくりたいという部分は絶対に守ろうという共通認識がありました。そういうことを共有できたのは大きな意味があったのだと思います。

具体的に考えた案は、性別によって分けられているのではなく、機能によって分ける形式です。

根本 設計者 コンペの時にトイレの事例をリサーチすると、ジェンダーレストイレと呼ばれるものはこれまでもつくられていましたが、そのほとんどは男性トイレ、女性トイレ、ジェンダーレストイレという形式でした。私たちが提案したのはそうではなくて、この機能を使いたいからこの便房を選んでいるというように見えるトイレでした。

川嶋 設計者 社会がどんどん変わっていく中で、公共トイレの形式はずっと変わっていません。それはおかしいと思ったので、トイレそのものに対して新しい提案をしなくてはならないと話していましたし、最初から完成までその意識で取り組みました。

(次号につづく)

ハーバードで考える 東京の極小・都市論

マイクロ・アーバニズム



会田友朗

大学を卒業しNYからボストンへ引っ越した10日後の2001年9月11日は、ハーバード大学デザイン大学院(GSD)建築学修士課程の入学式だった。式が中断され廊下へ出ると、テレビが2棟の高層ビルが崩壊する光景を映していた。異様な緊張感のなかで始まる学期。鮮やかな紅葉に彩られた秋のキャンパスで、航空機の飛行が禁じられ、高く澄んだ空の静けさが際立っていた。

ハーバード流・都市論と社会批評的建築教育

GSDは、建築、都市デザイン、ランドスケープデザインが中心のプログラムで、伝統的に「都市」への関心が深く、当時は、都市デザインへの造詣の深いピーター・ロウが学部長を務めていた。また、建築理論家のK・マイケル・ヘイズやその教え子たちによる社会批評的な建築観も特徴的で、選択科目の「建築理論」の講義では、ベンヤミン、ジンメルやフロイト等、毎週膨大な量の理論書を読まされた。当時の自分の英語力でレポートに何を書けばよいか苦悶した記憶しかない。その理論分野の若手として目立っていたサラ・ホワイティングが今ではGSDの学部長という。教育方針がとても興味深い。

2002年秋学期の設計スタジオでは、ブエノスアイレスの敷地をスタジオ全員で現地調査し提案した(旅費は大学や財団や協賛企業から支給)。建築家のホルヘ・シルベッティとアーバンデザイナーのルドルフ・マチャドによる「アルゼンチン国立文書館」の課題で、建築と都市デザインの2つのスタジオが合同でひとつのプロジェクトを提案するという、極めて分野横断的な出題で印象に残っている。

東京マイクロ・アーバニズム

そのスタジオでパートナーを組んだ、アーバンデザイナー専攻のグレンとAsiaGSDというアジア系学生団体の共同代表に立候補し、就任した。文化的な背景が多様なハーバードらしく、中東GSDやラテンGSDなど多くの学生団体があったが、なかでもAsiaGSDは当時最も活発に活動していた。毎年1度、海外から専門家や研究者を独自に招聘し、GSDの教授陣も交える大規模なシンポジウムが代名詞だった。前年度のテーマは上海の都市成長戦略を扱っていた。僕とグレンは、東京をテーマに「マイクロ・

アーバニズム」と称し、巨大開発とは異なる極小の都市論をあえて扱うこととした。同じ年に中東GSDがドバイのメガ開発をテーマにしていたことも対照的だった。

まずは資金集め。アメリカの財団や日本企業に企画書を送り、開催に必要な助成を獲得、夏休みに日本に一時帰国をして、東京での都市的な実践で活躍する建築家に企画を直接説明してまわり、参加の承諾をいただいた。キーノートスピーチは青木淳氏にお願いした。

当日、象徴的だったのはアトリエ・ワンと理論家サンフォード・クインターのセッションである。「メイド・イン・トーキョー」や小規模だが都市的な実践の紹介と、サンフォードによる茶道の美学と日本の都市の関係性への言及など、パネルディスカッションは盛り上がり、最後、サンフォードは半ば冗談まじりにOMAを参照しつつ「BIGNESSはもう古くて、これからはsmallnessが来るね」と言った。シンポジウムからちょうど20年。リノベーションまちづくりやコミュニティデザインの勃興など、スケールを問わない都市的な実践はむしろ当たり前の光景とも言え、時の流れを感じる。

印象的だったのは、当時建築学科長を務めていたトシコ・モリの閉会の辞だ。半ば日本的マイクロ・アーバニズムが楽観的に語られていた会の雰囲気(企画者である僕の責任だと思う)に釘を刺すように、「東京という都市は、2度徹底的に破壊された。関東大震災であり、第二次世界大戦における東京大空襲で。今の都市東京があるのはどん底からの復興があったことを私たちは決して忘れてはならない」とお話をされた。

今日、地震や洪水など大規模な災害や、人為的な戦争により都市が破壊される映像を目撃する日常のなか、あらためて建築家やアーバンデザイナーの仕事やその役割について考えさせられる、身の引き締まる一言だ。



カンファレンス全体写真

案内ハガキ(裏面)



脱経済成長とコモンを捉えた 建築まちづくり／ 地球環境と幸せを考える



JIA まちづくり会議
副議長
連 健夫

JIA建築家大会2023常滑の大会ウィーク(プレウィーク)において、オンラインでシンポジウム「脱経済成長とコモンを捉えた建築まちづくり／地球環境と幸せを考える」を行った。この問題意識は、建築やまちづくりに関わる中で、どのような方向に進めばよいのか?の視点を建築家は常に求められ、その方向性が見えなければ、建築行為は気づかぬうちに間違いを犯している可能性も生じてしまう。その俯瞰的視点を持つためには、建築を単体として捉えるのではなく、まちづくりを含めた幅広い捉え方が必要であり、そこには公共の福祉という公益的視点で建築家の職能を再考することが求められる。そこで、影響的な3冊の本『土地は誰のものか』『里山資本主義』『人新世の「資本論」』を取り上げ、著者の五十嵐敬喜氏と藻谷浩介氏を招いてレクチャーをいただき、『Bulletin』(295～297号)に掲載した読後感も含めてディスカッションを行った。

使用を共同にする／小さな経済循環を作る／次世代へバトンする

五十嵐氏は『土地は誰のものか』を通して、日本は絶対的所有権が強く、それが結果として土地をバラバラにしまった。所有権(使用、収益、処分)における使用を共同にすることにより、それらを再び結び合わせコモンとすること、すなわち総有の考え方が大切であると指摘された。藻谷氏は、バイアスのかかったマネー資本主義に惑わされずに、地域の資本をうまく活かすことが大切である。この資本には、人的資本、自然資本、物的資本、金融資本、知的資本があり、それらを自給や物々交換なども含めて、小さな経済循環を作ることが大切であると指摘された。小川真樹氏は『人新世の「資本

マネー資本主義と里山資本主義

	マネー資本主義者	里山資本主義者
共通点	市場原理(価格決定、競争、分業etc)を前提に、経済活動する	
理念	「経済成長」でパイを無限に拡大	「循環・再生」で社会を維持継続
欲望	ナンバーワンになりたい	オンリーワンになりたい
個人目標	所有財産の無限増加を目指して他人に勝ち、貯め込む	「替わり」のない存在になる = 確いでは回しバトンをつなぐ
戦略	階級バージョン: 他者/他集団から奪い取る	系群バージョン: 何でも自給自足する
	知能バージョン: 未来/次世代から搾取する → 海外資産を浪費して高財する (地下鉄、水、土壌、大気、子孫、貯蓄) → 借金や汚染物質を後世に残す	成器バージョン: お金とお金以外の手法をつまき組み合わせる → 使ったものは元に戻す → 1/10と清浄な環境を残す
手法	等価交換/金融投資 自由競争/リスクの個人化	物々交換・贈与/実物投資 協働/リスクの社会化

マネー資本主義と里山資本主義を比較した表

論』の読後感を通し、著者、斎藤幸平氏のマルクス論の解釈とともに、価値に対して世代間の捉え方が異なっており、未来を担う若い人にバトンタッチすることの大切さを説明された。

幸せとはなにか? / マンションの課題

ディスカッションでは、幸せとは何か?について「持続可能な生きがいのある生活」といったことや、「人と人との繋がりから生まれ、感じられるもの」などいろいろな捉え方が浮き彫りとなった。土地との関係については、利用権や借地権といった所有権以外の権利において協働することがポイントであり、協働作業の中で人と人との繋がりが生まれる。人との関わりの中でオンリーワンを各自が感じられれば幸せに繋がるとの視点は興味深い。五十嵐氏からマンションの区分所有の問題が指摘された。築40年以上のマンションは全国に116万戸あり、耐震補強や建て替えにおいて区分所有者の合意形成がうまくいかず、立ち往生している困難な事例が多発しており、土地所有の「細分化」の結末である、との話である。大きな問題であり簡単に答えは出ないが、マンションを単独で考えては解けず、地域も含めてまちづくりの視点で解いていく必要がある。マンション自体がプライバシーを重視するがために、人の繋がりを生み出す計画となっていないことも大きな原因である。その困難な状況の中で、建築家に合意形成におけるファシリテーション能力がますます求められるとともに、建築とまちづくりを併せて考える俯瞰的な視点も求められよう。

常滑建築家大会のテーマは「環」であるが、人と人を繋げる、建築と街づくりを繋げる「環」の視点が、当シンポジウムのまとめとして繋がったのは興味深い。



オンラインで行われたシンポジウムの様子

2023年度 第1回委員長・地域サミット 合同会議 (7/28) レポート



関東甲信越支部
常任幹事
水越英一郎

7月28日(金)にJIA会館大ホールで実施された、2023年度第1回委員長・地域サミット合同会議の様子をレポートする。関東甲信越支部に所属する各委員会と地域会の代表者が一堂に会する本会議は、3年振りに対面方式で実施され、約3時間半にわたって真摯な議論が交わされた。

第1部：JIA活動のミッションとこれから

会議は3つのパートで構成された。第1部は「JIA活動のミッションとこれから」と題し、委員会・地域会に共通する課題の1つである「教育・学生支援の取り組みについて」をテーマに、具体的な取り組みや課題についての報告と意見交換が行われた。

冒頭、渡邊太海支部長は、支部の組織構成や委員会・地域会に期待される役割や責務について再確認を行った。これに続き、学生デザイン実行委員会、神奈川・埼玉・栃木・群馬・長野・新潟の6地域会、北関東甲信越学生課題設計コンクールが順に報告。8つの事例を並列的に議論することで、それぞれの委員会・地域会の創意工夫や課題が見えてきた。また、それぞれの活動が地域の事情を反映したものとなっている点は興味深く、JIAの組織構成が良質な形で生かされていると感じた。

現在、教育・学生支援活動は、①シンポジウム、②ワークショップ、③卒業設計・課題設計コンクールの3つが主軸となっている。①シンポジウム、②ワークショップは、一般の方々にも広く開かれた形で実施されているケースがほとんどで、市民とJIAを繋ぐ有効な接点となっている。③のコンクールは、各地域の事情に応じて大学・高専・高校・専門学校等、幅広い学校が対象となっている点が興味深い。多くの報告者から、コンクールが学校間の交流を生み出すきっかけになっているという意見が挙げられた。

一方、いくつかの課題も見えてきた。地域の学生支援の活動が地域会の協力で運営されているのに対し、「東京都卒業設計コンクール」は、学生デザイン実行委員会のみで運営されており、報告の中では都内地域会に対して人的・経済的支援のお願いを行う等、活動の活性化に向けた提言も行われた。

第2部：建築家資格制度のこれから

第2部では昨年より継続的に実施されている「建築家資格制度」についてグループディスカッションと意見交換が行われた。冒頭、渡邊支部長より、これまでの経過や理事懇談会による素案について解説があり、それを受ける形で5つのグループでのディスカッションが行われた。今回のディスカッションはそれぞれが正会員として、個人の意見・感想を述べることを前提に行われた。

今回寄せられた意見・感想のほとんどは、理事懇談会が提示した素案に対する疑問であった。資格制度化の目的、国家資格を目指さない理由、これまで資格制度を検討してきた職能資格委員会の答申との関係など、基本的な事柄に関するものも多く、素案の意図が会員に浸透していない印象を受けた。これに対し、渡邊支部長は理事懇談会に参加したメンバーの1人として、この日の意見を理事会に報告するとともに、会員への理解を深める継続的な説明の必要性を述べ、理解を深めるために各地域会や委員会に赴く意思のあることを語った。

第3部：委員会・地域会からの報告

第3部では学生の会@joint、オンライン/リモート特別委員会、環境委員会、JIAトーク実行委員会、交流委員会から近況報告が行われた。それぞれ有意義な活動が展開されているので、HP等を確認していただきたい。

今回は教育・学生支援、資格制度の2つをテーマに意見交換を行った。教育・学生支援では、他の委員会・地域会でも参考になる多くの工夫が発見できるとともに、活動の質を維持するための課題が確認できた。資格制度については多くの会員が疑問を呈する結果となったが、これも1つの成果と言える。この結果を受け、常任幹事会では活動のさらなる充実を目指し、継続的な議論や課題解決に向けた方策の模索を行うことを確認した。資格制度は多くの関係者が尽力を続ける30年にも及ぶ取り組みであり、昨年の理事懇談会による素案提示は具現化に向けた第一歩と言える。今後、会員間での理解をいっそう深めるとともに、社会に貢献する良質な制度として深化していくことを期待する。

資格制度の歴史に学ぶ



関東甲信越支部
常任幹事
安川 智

前回『Bulletin』2023秋号において、新春の支部会員集会における「資格制度のこれから」に関する基調講演についてレポートした。私自身、支部常任幹事会の資格制度担当を拝命し、昨年よりにわか勉強を始め、諸先輩から紹介される記事や文献に目を通すうちに、自分の考えが次第に変わっていくこととなった。今回はわずかではあるが資格制度の歴史に触れつつ、今必要な議論について考えてみたい。

資格制度の歴史

日本における資格制度は1950年建築士法制定の40年前、今から100年以上前の1914年JIA前身の建築士懇話会の設立に始まる。当時、東宮御所(迎賓館)のような西洋建築の技術と、イギリスやフランスで先んじて制定された建築家法を同時に輸入する取り組みであった。設計施工一貫が当たり前であった日本において、設計専業である西洋の建築家と同じく、建築士の称号独占と設計業務独占を試みた1925年の建築士法案はゼネコンの大反対を受ける。また、関東大震災の復興時期に当時の建築士会に所属するわずか100名ほどを対象にしたこの法案が実現することはなく、その後、当初の法案から形を変えてようやく1950年に制定を迎える。

JIAにおける資格制度の議論の変遷

新春の集いで発表したJIAと日本建築士会連合会(士会)の資格制度の取り組みについてポイントを抜粋する。

1955年	UIA加盟、翌1996年に日本建築家協会に改組・改名
2002年	「新たな建築資格制度新設に向けての2団体基本合意書」。士会専攻建築士制度「統括設計専攻建築士」とJIA「登録建築家」を同等性のあるものとして整備、長期的に統合していく二会合意
2003年	JIA建築家資格制度(登録建築家)スタート、士会専攻建築士制度をスタート、建築関係4団体会長懇談会(連合会、日事連、JIA、建築学会)において資格・入札・保存の統一見解、建築業協会(BCS)を加えた5会長懇談会
2005年	構造計算書偽造問題(姉歯事件)発覚
2008年	改正「建築士法」により新しい建築士制度がスタート
2012年	JIA正会員全てが登録建築家、登録建築家を専業のみ一部オープン化から完全オープン化への議論

2002年の二会合意から、建築業協会(BCS)を加えた5会長懇談会へとゴールを目前としながら、2005年姉歯事

件により議論は休止、新たな建築士制度へと形を変えていったことがうかがえる。

くり返される議論と消費される時間

2023年年始より「資格制度」をテーマにさまざまな勉強会や討論会が行われ、議論が活発化してきた感がある。同時に、議論の場所を変え、参加者が広がるにつれて、議論が拡散するようにも思える。根底となる理想論(総論)は同じとしながら、手段や手法(各論)の議論になった途端に個々の立場や利害が故か、過去と同じ議論を繰り返している感が否めない。JIA「10の取り組み」の1つに「国民が設計の専門家(建築家)に安心して仕事を任せられるようにするために…」とある。改めて誰のための資格制度かを考えることが最も重要ではないだろうか。

変化すべきものと不変であるべきもの

2023年3月26日、米ゴールドマン・サックスの報告書においてAIが自動化する仕事の割合で、「建築設計・エンジニアリング」は、①事務・行政サポート、②法務に続き第3位という記事が報道された。日本で資格制度の議論がスタートして約100年が経過しようとしている今、クライアントは時代の変化を敏感に理解し、AIを含む多様な建築家から選択できる時代が近づいている。

一方で佐藤会長が掲げた「頼りになる建築家、頼りになるJIA」は、施主のため、社会のため、未来のため、建築家ができることを再認識させてくれた。時代の変化に左右されない強い信念と、時代の変化に合わせて変容する勇気を持ち、日本の住宅を含む建物全般を考えた、あるべき制度は何かを改めて考えることが必要である。

おわりに

現在、支部常任幹事会の資格制度メンバーを中心に、歴代会長時代に資格制度に取り組みされた方々から当時の様子や資格制度素案への意見をお伺いすることを目的に勉強会を開催している。次号ではその様子や建築家大会2023プレイベントの様子をレポートしたい。

〈参考文献〉

- 1: 速水清孝『建築家と建築士 法と住宅をめぐる百年』東京大学出版会
- 2: 「改めて登録建築家を考える(第1~4回)」『Bulletin』(277~280号)
- 3: 「クロニクル 歴代会長とその頃のこと」『創立70周年記念誌 70年のあゆみ』日本建築士会連合会

邪道建築家の目指すモノ



青木恵美子

私は、戦後日本がまだ裕福でない時代の横浜生まれ横浜育ちのハマッコです。私が「建築家になりたい！」と建築家を目指したのは中学3年生の時。中3の少女に何がおこったのか？ それは同級生の死でした。今の医療では当然助かるのですが、当時の医療では小児喘息の発作が間に合わず同級生は15歳で命を落としました。

15歳という多感な時期の私は、「人の死」に相当にショックを受け、いろいろと考えるうちに自分の将来を考えました。普通でしたら「人の死」を克服しよう！と医者を選ぶところですが、「人の死」に真っ向から挑戦する勇気がなかった私が出した答えは、「人の死」の反対で「人の生」、しかも「人が楽しく生きる」ことを生涯の仕事にしよう！と思いました。「人が楽しく生きる」ことができる＝楽しい暮らしをつくりたい！それが、私には「建築家」でした。

こうして、私は15歳のとき「人が楽しく生きる」空間をつくりたくて「建築家」を志しました。つまり、私の中の「建築家」は暮らしをつくる人であって、建物をつくる人ではなかったのです。

そんな“楽しい暮らしのある空間づくり”の建築家を目指した私の転機は、海外建築家のPJが盛んなバブル時代でした。所属する建築事務所がザハ・ハディドとリチャード・ロジャースのバックアップ事務所となり、私はザハのPJを担当させていただきました。ザハがまだ「アンビルドの女王」であった時代、東京麻布十番商店街の細長い敷地に計画された5階建(だったと思う)のペンシルビルと渋谷の富ヶ谷の住宅でした。

麻布十番のPJでは、前傾しながら左右も傾斜するサッシや美しい曲線のキャノピーなど今まで見たこともないデザインを図面化(当時は手描き)することに苦労しましたが、圧倒させられる発想力とデザインの重要性に本当に目から鱗の日々でした。クライアントを交えたザハとの打ち合わせが衝撃的だったことは言うまでもありません。ザハやロジャースのスタッフとは日々闘いのような毎日でした。しかしバブル崩壊とともにその物件はバブル＝泡となりました。工事着工は迎えられませんでした

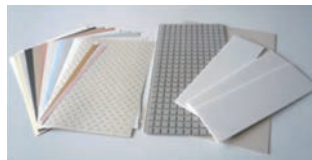
たがこの経験は代え難いもので、私はこれを機にA・Aプランニングという事務所を立ち上げました。

「AA」とはAoki Architectですが、ザハに肖り「AAスクール」からも名前を頂戴しました。そして建築家を目指した15歳の原点である“楽しい暮らしのある空間づくり”を実現するべく、「さりげなく美しく自分らしく楽しく」をモットーに住宅設計や街並みデザインをしました。

なかでもこれからはカラー(=色)の時代と思い、色彩学を学び直してカラーコーディネーター環境分野の資格を取得し、街並み計画に取り入れ、カラーを切り口に一般の人にもわかりやすくインテリアを紐解きました。人々が楽しく自分らしい暮らしができれば……という一心で、簡単に空間を考えるオリジナル模型キットを開発して特許を取得し、中高生の教材に採用され、講演会・大学やメディアで住育活動を繰り広げました。60歳を過ぎてからは「食」「住」を結びつけ、テーブルの上のデザインも提案しています。

もともと邪道建築家である私は、日々豊かな暮らしのために「さりげなく美しく自分らしく楽しく」暮らしを提唱する、建築家の枠に囚われない建築家としてこれからも邁進していきます。

住教育「暮らしのデザイン」教材(中学生教材対象)



暮らしのデザインを考える模型キット



いろいろな素地の検討から暮らし作成過程



高校生の授業採用事例

予測不能な時代を サバイブする、 「状況の中の建築」

井原正揮



独立して8年、建築家としては青二才。強い設計手法やコンセプトをあえて持たずに設計活動をしてきたように思う。その中で、心に残っている小さなプロジェクトが2つある。1つは「はなれのはなれ」(2016)、もう1つは「miike」(2021)だ。

「はなれのはなれ」は、東京都港区のビルのガレージを私たちの住居兼事務所へとリノベーションしたものだ。道路向かいのワンルームを寝室とし、都市を廊下や庭と見立てた。建築的な操作としては、都市の中にポツンと取り残された洞窟のような空間に家具のような設えを入れ込むこと、それが再開発で変わりゆく街の中での小さなレジスタンス活動だと考えた。

「miike」は、長野県東御市^{とうみ}のどこにでもあるような農業用倉庫を美容院へと再利用した。倉庫の外壁下地である胴縁を内外装のデザインコードへと読み替えること、それは抵抗でも隷従でもなく、風景に溶け込むようなサバイバル術だった。そう考えると、「はなれのはなれ」もレジスタンス活動ではなく、都市の中で生き抜くサバイバル術だったのだ。

建築は、状況の中でこそ意味を持つ。「建築そのもの」「外部から見た建築」「建築から見た外部」という3つの視点だけでなく、4つ目の「状況の中の建築」という視点が、建築の未来を照らす。そんな白昼夢を見て、ワクワクする毎日を過ごしている。



「はなれのはなれ」(2016年)
30年前に植えられた銀杏や紫陽花が木陰をつくる前面広場(都市計画道路)を介して、街と内部空間が繋がる
※再開発のため2021年に解体



「miike」(2021年)
施主によって竣工後に少しずつ植えられた植栽によって、内外の繋がりがより強くなった

五感を刺激し、 能動性を喚起する 建築をめざして

御手洗 龍



独立して今年でちょうど10年になります。新たな建築を模索する中、多くの方に支えられながらここまで来られた気がします。

そして建築の思考を深めてきたこの10年の中で1つ大きな転機がありました。それは大学の仕事で2015年にブラジルを訪れた時のことでした。さまざまな建築や都市の側面を観ていく中で、最も強く印象に残ったのがファベラ(スラム街)でした。

リオデジャネイロの崖にしがみつくようにして広がる、ファベラ Vidigalには本当に驚きました。そこは無法地帯で所有もなく、土地が空けば自分たちでコンクリートを打設してすぐに家を建ち上げていきます。家と家は隙間なく繋がり、絶えず破壊と建設が繰り返され、それはまるで動き続ける1つの巨大な生き物のようにも見えました。そこへ町から無数の電線を引いて盗電し、給排水のインフラを住人たちで整備し、ゴミ捨て場や広場、公共的な小さな図書館や交通手段までを自ら立ち上げていました。そして家々の目の前には南大西洋の青い海が広がり、その美しい景色を眺めるテラスや風の抜ける大きな窓が設えられているのがとても印象的でした。

環境も相まって、それが私にはとても人間的で豊かな暮らしに見えたのです。生きていく様子が人々の能動性に満ち溢れ、とても心地よさそうです。「豊かさって何だろう?」と考え始めるきっかけとなりました。こうして今私たちの事務所では、人間の五感を刺激しながら、能動性を喚起する建築を模索する日々が続いています。それが真に豊かな時代の一助となればと考えています。



ファベラ Vidigal

港地域会×杉並地域会

「新・建築家の本棚」

杉並地域会
利光 収

地域を横断する文化交流の試み

暑さも厳しい8月19日(土)、港地域会と杉並地域会による文化交流イベント「新・建築家の本棚」が国際文化会館で開催されました。このイベントは杉並地域会が毎年行っている「土曜学校」の企画が始まりで、「本」を題材にした文化交流の機会でしたが、2年前より他の地域会と共催することで活動を広げていこうと、第1回を世田谷地域会、第2回を文京建築会(JIA文京地域会+東京建築士会 文京支部)と共催し、今回は第3回目となります。

イベントの形式はシンプルで、皆で本を持ち寄り、本をテーマに交流をするという内容です。会場はその都度その地域ゆかりの名建築+名庭園を舞台とすることで、空間も併せて体験できるというコンセプトなのですが、今回は国際文化会館の修繕現場見学の機会を含む、建築と庭園の見学会も併せて企画開催されました。トークイベントは「私の一冊」と題し、各地域会から2名ずつ、計4名の登壇者が、持参した本にまつわるエピソードを紹介します。その内容は多岐にわたり、今回も大変興味深い学びの機会となりました。

思考を支える本

港地域会からは田口知子さんと村上晶子さん、杉並地域会からは宮元三恵さんと私が登壇者です。田口知子さんの『ラダック 懐かしい未来』(ヘレナ・ノーバーク・ホッジ著)は、原題が*ANCIENT FUTURES Learning from Ladakh*で、インド北部旧ジャンムー・カシミール州東部の高山地帯を訪れたスウェーデンの言語学者がその地域の生活文化に魅了され、長くその地で暮らしながら記録された、持続可能な地球社会の在り方への考察が綴られています。それが今の私たちの社会のさまざまな場面においても持続可能性を思考する際のヒントになるのではないかという、田口さんの言葉が実感を持って感じられました。村上晶子さんからは遠藤周作の『沈黙』と『深い河』が紹介されました。著者の遺志で亡くなられた際に棺に入れられたというこの2冊は、日本人がキリスト教徒として生きることの難しさや葛藤を分かりやすく文章にしている本であることと、村上さんご自身にとっても坂倉建築研究所にて数々の教会建築に関わられてきた

時に、思考のよりどころになったこととお話しいただきました。そして1996年に聖イグナチオ教会の旧聖堂で遠藤周作の葬儀が行われた時に、隣接する新聖堂の工事現場の監理をされていたエピソードをお聞きし、大きなつながりを感じました。

宮元三恵さんからは『目の見えない人は世界をどう見ているのか』(伊藤亜紗著)を、身体と空間認識の関係や、視覚に頼らない空間認識についてのエピソードと共にご紹介いただきました。視覚を失っている人の空間把握力についてのお話は興味深く、建築物の設計ではバリアフリーやユニバーサルデザインなどにも関係しますが、“空間認識のしやすさ”が、ただ段差がないことなどはまた別の次元で考えるべきことであることを再認識しました。最後に私は『ラスベガス』(R・ヴェンチャーリ他著)で大学院生時代に友人たちと読書会をして、建築や都市を観察し、記録し、考察することや、象徴性(シンボリズム)や連想作用(アソシエーション)についての論考に感銘を受けて建築の見方がそれまでと大きく変わったエピソードをお話ししました。その他、多くの書籍が会場に集まり、交流のきっかけとなりました。終盤に曾根幸一さんから国際文化会館誕生のエピソードのご紹介があり、国際文化会館から原図を拝見する機会をいただきました。

新しい本との出会い

現代においては必要な情報にアクセスすることは容易になりましたが、思考することそのもののスピードと「本」というひとまとまりの紙媒体の関係はつながりが深いのではないかと思います。多様な本との出会いがあるこのような機会を今後も多くの方々と共有し、参加いただきながら、充実した文化交流を継続開催していきたいと思っています。

国際文化会館屋上の
見学風景

JIA 東京都学生卒業設計コンクール 入賞者によるトークセッション



学生デザイン
実行委員会
木野内 剛

リラックスして話せる場所

9月2日(土)、建築家会館にてJIA東京都学生卒業設計コンクール入賞者によるトークセッションを開催しました。今回が2回目で、コンクール入賞者をパネラー、コンクール審査員をコメンテーターとして、オーディエンス(会場とWeb)を交えたトークイベントです。

このトークセッションは、コロナ禍で密な対話が憚られ、卒業設計コンクール後の懇親会が開催できない状況が続く中、コンクール後のフランクな対話の場がないことがきっかけで、やはり、そういう時間は大切だよねという思いから始まりました。

コンクール等の後に開催される懇親会は、審査結果が出た安堵感や開放感に後押しされ、コンクールへの労をお互い称え合うとても良い時間です。コンクール参加者と審査員の思いがけない本音がそこかしこで偶発的に生まれることもしばしば見受けられます。

過去の自分を振り返ると、大学を卒業して間もない時期は、自分の目指すべき方向が明確に定まっていたわけでもなく、不安定な時期であったことをはっきり記憶しています。また得体のしれない何らかの壁が目の前に立ちふさがっている学生も多くいるのではないのでしょうか。

そのような状況の中で、審査員や友人の何気ない一言がインスピレーションを与え、自分自身を奮い立たせ、壁を乗り越える力に変えてくれるような「人生を変える言葉」になる可能性があると思っています。「社会教育」というと、やや大げさで、すわりが悪く落ち着きませんが、コロナ禍で密な対話の自粛というもっもらしい理由を建前に、「人生を変えるような言葉」をつかむ機会を提供しない理由はありません。

トークセッションで目指したこと

トークセッションのテーマは第1回に引き続き、「卒業設計でめざしたこと、できたこと、できなかったこと」としました。プログラムは第1部と第2部で構成し、第1部ではテーマについて、パネラー(入賞者)自身の体験を自分の言葉で語ってもらいました。自身がどのように卒業設計に取り組んだのか(どのように卒業設計のテーマを決めたか?プレゼンテーションで成功した点と失敗

した点は?)卒業設計を終えて、得られた知見について振り返り、自身の言葉で語ってもらいました。また昨年のパネラーからは、一軒家を借り上げ、住み込みで作業した様子や、研究室に寝袋を持ち込み、寝床の横で食した先輩からの差し入れの写真などを紹介してもらい、片肘張らずリラックスした雰囲気の中、真っ直ぐに、正直に、自分の気持ちをそのままストレートに、自らの特別な体験を自らの言葉で語ってもらいました。

第2部は1部で他者の意見を聞いて気づいたこと等について、パネラーとコメンテーター、オーディエンス同士で意見交換を行いました。最後には「卒業設計で後輩に伝えたいこと」についても発言いただき、オーディエンスとして会場でリアル参加してくれた学部生からは、欧米と日本の卒業設計のプロセスの違いについて、積極的な質問が出され、さまざまな観点から意見交換をすることができました。

コメンテーターの渡辺真理先生、西田司先生、原田麻魚先生には、リラックスした雰囲気の中で、学生たちが自由に話し合い、意見や新たな発想を生み出す対話を見事に誘導していただき感謝しています。

お勧めしたいこと

「進まざる者は必ず退き、退かざる者は必ず進む」。福沢諭吉が著した格言です。人は留まることはできず、前進するか後退するかのどちらかで、進むことをやめた瞬間に相対的に後退が始まることを警鐘しているそうです。この時期の学生には、今いる場所から、まず一步前に出て、新たな視点から物事を捉え直してみることをお勧めしたいと思います。今後も学生のためにさまざまな観点から支援できるよう、全力をあげて一層誠実に取り組んでまいります。



トークセッションに参加された、パネラーとコメンテーターの皆さん

交流委員会 Bグループ

歴史的建造物で納涼会開催

— 清澄庭園「涼亭」にて —



交流委員会
Bグループ代表幹事
エスケー化研
鈴木祐一

スーパームーンの夜に歴史的建造物で納涼会

私たち交流委員会Bグループは、防水材メーカー・塗料メーカーで構成されており、コロナ禍では各社協力しながらオンラインセミナー等の活動を行ってきました。この3年間を振り返りますと、対面での打ち合わせや会合などが制限され、人との繋がりの大切さを再認識した期間でもあったように思います。

そのような中、Bグループでの懇親会を納涼会として8月31日(木)17:30より行いました。図らずも今年は記録的な猛暑となったため、清澄庭園「涼亭」での涼を求める企画としました。当日は、都営大江戸線、半蔵門線の清澄白河駅から徒歩数分の清澄庭園に現地集合としましたが、集合時間より前に到着し庭園内を散策しました。岩崎弥太郎が明治18(1885)年に荒廃した大名下屋敷を改修、築造した回遊式林泉庭園は、都心とは思えない風情を感じながら当時の様子に思いを巡らせることができます。三菱社員の慰安の場としても利用されていたようなので、現在の福利厚生施設といったところでしょうか。

●「涼亭」について

明治42(1909)年に国賓として来日した英国陸軍のキッチナー元帥を迎えるために岩崎家3代目総帥の岩崎久弥が建設。銅板葺き数寄屋造りで、設計は三菱合資会社の保岡勝也による。戦災をまぬがれ今日に至り、昭和60(1985)年に全面改築工事を行い、現在は集会所として利用できる。平成17(2005)年「東京都選定歴史的建造物」に指定。

対面での交流の大切さを再認識

納涼会には14名が参加されました。大泉水(池)に突き出るようにして建てられた「涼亭」は、空調が効いた27畳の広々とした室内から夕暮れの庭園が一望でき、



「涼亭」内での集合写真

縁側からの池に浮かんでいるかのような眺めは開放感があり、この上なく贅沢な時間を味わうことができます。ご用意いただいた松花堂弁当とお寿司に加えて、美味しいお酒を和やかな雰囲気の中いただきました。月次のBグループ定例会がオンライン併用の形式となっていたので、こうして対面で揃うのはいつ以来かなと考えていました。古い人間なのかもしれませんが、やはり対面で表情や雰囲気を含めてお話しすることの重要性や、オンラインでは補えない一体感を感じたひと時でもありました。

お酒が進むにつれ会話も弾み、気がつけば辺りは夕闇に包まれ、庭園の景色も街灯周辺がわずかに確認できる程度となっていました。縁側に出てみると近代の東京スカイツリーのイルミネーションが見え、私たちがいる歴史的建造物との空間に不思議な完成度を感じつつ、偶然の演出である夜空に浮かぶスーパームーンの光に照らされた景色には、新旧が融合する建築文化の新たな可能性を感じられたように思います。

コロナ禍により働き方や生活の在り方が変化し、加えて多様性と持続性が求められる現代において、JIA活動を通じて私たち協力会員が建設業界にどのような貢献ができるか。また、人材不足が加速する昨今、広い世代の関係者の方々と繋がりを構築するためにはどのような取り組みができるかを考えながら、引き続き尽力してまいりますので、ご支援、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。最後に開催にご協力いただきました皆さま、並びにご参加いただきました皆さまに心より感謝申し上げます。

〈参考文献〉東京くらしねっと

<https://www.shouhiseikatu.metro.tokyo.lg.jp/kurashi/1711/keikan.html>



大泉水越しに見る「涼亭」とスーパームーン

交流委員会 Dグループ

施設見学会・懇親会開催

—熊本城見学会—



交流委員会
Dグループ
リリカラ
青山 央

施設見学会の本格的再開

コロナの流行もようやく落ち着きが見えてきた中で、かねてより計画延期になっておりました、熊本城の復旧工事見学会が、熊本城特別見学通路を設計された日本設計様のご尽力により、2022年12月9日(金)から12月10日(土)の日程で開催できました。

見学会当日の12月9日は天候にも恵まれ、参加者は熊本城に集合し、施設を見学させていただきました。

この熊本城特別見学通路は、熊本城の復旧を見届けるため20年間限定で存在する仮設の空中歩道で、前例のない特殊な施設です。その計画においては、地中や地表に残るさまざまな遺構に配慮、また、崩落した石垣の外形ラインから崩落範囲を想定し、数々の制約があるなかで構造計画を立て、20年間継続する復旧工事の工事関係車両動線を考慮しながら、見学者が安全に見学できる空間を実現させなければなりません。特にロングスパンの架構は計量化、制振性、安全性に配慮する必要があり、使用素材の強度や耐久性などに加え、透過性の高い一体的なデザインを成立させるように設計されたとのことでした。

そして、この見学通路全体が照明による効果を含め、風景に溶け込みきれいに见せるデザインで、新たな観光資源としての創出を目指したことなど、苦労された点について、実務を担当された方ならではの大変深いお話をうかがいました。

また、見学ルート of 敷地内には天守閣や石垣、連続桁形や重要文化財である櫓群などの見どころに加え、多くの既存樹木が守り残されているため、豊かな自然の景観も眺められ、癒されながらの見学ができました。

今回の見学会は日本設計様と熊本城の施設管理ご担当者様のご協力のもと、通常では見学することができないエリアもご案内いただき、本当に貴重な施設見学体験となりました。見学会終了後は熊本市内にて懇親会が開催され、多くの皆様にご参加をいただき大いに盛り上がりました。

その後の見学会・懇親会開催について

Dグループでは、熊本城見学通路見学会以降、協力会員企業各社様に協力をいただき、リアル&リモートで見学会や製品説明会を実施しています。

プラス様の恵比寿ガーデンプレイス「PLUS DESIGN CROSS」、日本設計様の虎ノ門ヒルズ新オフィス、チヨダウテ様の蔵前ショールーム、クマヒラ様の日本橋三井タワーショールーム見学会および製品説明会など、協力会員企業と正会員の皆様が活発に活動し、情報交換や、リアルに製品に触れる機会を設けています。そして見学会終了後の懇親会では、さらに親交が深まります。

これからも交流委員会Dグループでは正会員の皆様と企業協力会員の積極的な交流を図り、さまざまな施設見学会や懇親の場を作っていきたいと考えていますので、皆様の参加とご協力をよろしくお願いいたします。



仮設の空中歩道、熊本城特別見学通路



熊本城をバックに集合写真

今号は、学生会員個人の活動を紹介する「次世代のタマゴたち」を2名分お届けします。

次世代のタマゴたち



よく見ようとする

学生の会 @joint 伊藤綾香
日本大学理工学部建築学科4年

豊島美術館での体験

建築を専門としないメディアを学ぶ地元の友だちと、豊島美術館を訪れたときのことで。小道のアプローチを経て、普段からスマホを片時も手放すことのない友だちとスマホの使えないアートスペースに入ります。水が滴っている床をぼーっと眺め、太陽と雲の動きに合わせて居場所を移し、何時間も空間に留まる友だちの姿が印象的でした。建築が生み出した空間が、情報でいっぱいになった手のひらサイズの四角いやつを忘れさせ、体を反応させることがあるという事実に遭遇して胸が躍りました。視界に入るものは日常に溢れているコンクリート・水・リボン・自然であることに気がつきます。私はこの感動をよく見て、日常と何が異なるのか考えることで建築を理解しようと思いました。

「好き」に反応する——子ども建築塾からの学び

建築って何だろう、そんなことを思い伊東建築塾にTA



イメージ
(日常の陰の豊かさ)

として参加して早1年が経ちました。そこでは多くの刺激を受けています。塾生は自分の好きな体験や好きな場所から建築を考え始めます。その真っ直ぐな姿を見て、建築のきっかけが誰かの「好き」から始まっていいのだと思いました。その塾生の「好き」に反応するために、スケッチをよく見て話によく耳を傾けるよう意識しています。

私は何を伝えられるのだろう

日常の陰に佇む小さな豊かさや「好き」を見つけ出して創造することが建築なのだしたら、日常をもっとよく見なければならぬと思うようになりました。建築という学問のフィルターを通して、自分の見ている日常の彩度が上がっていくのをようやく実感し始めています。

次世代のタマゴたち



建築倉庫での展示を通して

学生の会 @joint 山田愛華
国士館大学理工学部理工学科建築学系4年

4月28日から6月18日に天王洲アイルのWHATミュージアム建築倉庫で開催された企画展「Tokyo Canalling～アートの揺籃、運河の東京～」に参加しました。東京の運河を再生し、アートによる異種交流の場を創造するという設計課題のもと、芝浦の運河沿いにアートインキュベーションセンターを提案し、模型を出展しました。展示やプレゼン動画の上映、トークイベントの準備などにも携わり、有料の企画展示の難しさを実感しました。

トークイベントでは、建築家や美術学校の先生、ランドスケープアーキテクトの方などから貴重なご意見をいただくことができ、私自身とても気付きが多かったです。大学内でのプレゼンや講評会とは違い、建築を知らない方や分野の異なる方に説明をし、違う視点からの質問を受け、ど



建築倉庫の展示の様子

うしたら伝わるかを考え、いろいろな人と会いました。課題のように図面やダイアグラムなどを使わず、模型だけの魅せ方を学びました。配置では各々が見せたい魅せ方ができるような照明の当て方やポジション、部分模型などを用意し、細部までこだわることができました。この展示は模型製作、展示方法において、私にとってとても成長できる素敵な機会になりました。

今後、@jointの街歩きで建築倉庫を訪ねる予定です。その時は、展示作品の展示方法やキャプションなど小さな情報から読み取れる出展者の思いを想像しながら見ていきたいです。

ウルトラマラソンに挑戦



外秩父の山をかけ下りる

「ひといき」というコーナーですが、少々息が上がる話かもしれません。

最近、トレイルランニングとウルトラマラソンに挑戦しています。トレイルランニングは、野山を走り回る競技です。新型コロナでマラソン大会が相次いで中止の折、比較的参加人数の少ないトレランの大会は開催していました。大学でワンダーフォーゲル部だったことから、地図を見て山に入ることもなじみがあり、始めてみました。そして、コロナが明けてからチャレンジしているのは、フルマラソン以上の距離を走るウルトラマラソンです。

「なぜそんな苦行を？」と問いかけられますが、個人的な見解で良い点を挙げてみます。

- ・ **自分の限界に挑戦できる**
常に自己新記録を狙う。歳を重ねる以上に鍛錬することで、体力年齢を下げられる。
- ・ **完走後の達成感を味わうことができる**
苦しさを乗り越えた時のうれしさは半端ないです。

- ・ **自分へのご褒美 “温泉とお酒”**
ご褒美は必要です。極楽です。
- ・ **大自然の風景を体で感じるができる**
山を走ると大地からのエネルギーをもらえます。リフレッシュできます。
- ・ **御朱印がたまる**
走る先々で神社へも参拝しています。御朱印集めがモチベーションになっています。
- ・ **日常から離れ「無」になれる**
走っているときは無我です。頭の切り替えができます。
- ・ **楽器演奏に有効**
吹奏楽団で金管楽器 (Tubaと Euphonium) をやっており、ロングトーンが続きます。
- ・ **日常生活で疲れにくくなる**
トレーニングの成果か、いつまでも仕事ができる (デメリットもありますが…)

このように野山を走る体験はすばらしいと思っています。

次は、南伊豆みちくさウルトラマラソン 100km に挑戦です。100km の先に何かあるのか、まだ見ぬ未知の世界へ、楽しみます。

(村田行庸)

今年を振りかえって感謝することは

編集後記

- さまざまなイベントが復活してきた。その場の空気感はオンラインでは味わえない。まだ予断を許さないがリアルで人に会えることに感謝。(望月)
- 3年間畳んでいた羽を伸ばし飛び回ることができたこの1年。疲労感と鈍った身体が原因と信じていたが、単に歳を重ねたせいなのか?(知見)
- 我々のこだわりに応えようと、いつも遅くまで残って作業に打ち込んでくださっている職人さんたち。本当に感謝しかありません!(関本)
- はじめて会う人、ひさしぶりに会う人、もう会えない人。すべての出会いに感謝。(大塚)
- 最近では以前のように移動が増えて家を留守にしがち。温かく帰りを迎えてくれる家族に感謝!(会田)

- コロナ禍明けの日常に戻り、4年ぶりのリアル再開。懐かしさと共に昔を振りかえる機会が増えて、これまでの出会いに感謝。(中澤)
- この号で『Bulletin』初めての執筆。テーマも難しく、慣れない作業でかなり苦労しました。(小山)
- これまで寄稿してくださった方々、『Bulletin』を読んでくださっている皆さま、『Bulletin』を支えている編集WGメンバーに感謝!(佐久間)
- いいこと、嫌なこと、みんなみんなありがとう。感謝します。(竹内)
- 広報委員になって初の座談会を企画、充実した議論が作成できました。参加者の皆様、編集者さんに感謝!(田口)
- 『Bulletin』を通じてのさまざまな巡りあわせに感謝。(小倉)

編集 : 公益社団法人 日本建築家協会
関東甲信越支部 広報委員会
委員長 : 田口知子
副委員長 : 関本竜太
委員 : 望月厚司・伊藤立平・竹内祐一・佐久間達也・大塚浩子・磯野智由・小倉直幸・小山光・井筒悠斗
編集長 : 佐久間達也
副編集長 : 望月厚司
編集ワーキングメンバー : 広報委員+市村宏文・中澤克秀・会田友朗・吉田満・長谷川理奈・知見徹摩・立石博巳
編集・制作 : 南風舎

Bulletin 298 2024 冬号
発行日 : 令和5年12月15日
発行人 : 大西摩弥
発行所 : 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 2-3-18 JIA 館
Tel : 03-3408-8291(代) Fax : 03-3408-8294
印刷 : 株式会社 コラボ
■ JIA 関東甲信越支部関連サイト一覧
・ (公社) 日本建築家協会 (JIA) <https://www.jia.or.jp/>
・ JIA 関東甲信越支部 <https://www.jia-kanto.org/>

■ 定価 300円+税/会員の購読料は会費に含まれています。

© 公益社団法人 日本建築家協会 関東甲信越支部 2023



Tile Diversity changes,



Landscape



ケコミの特徴

- 型枠不要の簡単施工
- 強度が高い
- 照明設置可能



KEKOMI

タイル張り蹴込階段用下地ブロック/ケコミ

OUTDOOR CERAMIC TILE

NITTO 株式会社ニットー

本社/岐阜県土岐市駄知町1707-2 TEL 0572-50-1550

東京office/東京都新宿区信濃町3 S.COURT202 TEL 03-5312-8212

※商品サンプルをご用意しておりますので、お気軽にお問合せください。



nitto-web